

ホクチヤ遺跡

—快速で安全な道づくり事業費（補助）一般県道
佐野環状線黒羽工区に伴う発掘調査—

2019.6

栃木県教育委員会
公益財団法人とちぎ未来づくり財団

ホクチヤ遺跡

—快適で安全な道づくり事業費（補助）一般県道
佐野環状線黒袴工区に伴う発掘調査—

2019.6

栃木県教育委員会
公益財団法人とちぎ未来づくり財団

序

ホクチヤ遺跡は、栃木県の南西部、佐野市に位置しています。佐野市は豊かな自然と多くの歴史と文化財を擁するとともに、東西・南北の高速道路が交わり、首都圏近郊の利便性から、さらなる発展が期待されています。

この度、栃木県県土整備部による佐野環状線の改良工事に先立ち、路線内に所在する遺跡の取扱いについて、関係機関と協議の上、記録保存を目的とした発掘調査を行いました。

発掘調査では、平安時代の集落であるホクチヤ遺跡の一部を確認し、本県でも珍しい三彩陶器の托という器の受台も発見されました。遺跡の付近は県内有数の古代窯跡地帯で、窯業にかかわった人々の生活の様子が明らかになりました。また、堀跡は佐野氏の家臣も居城した黒袴藤岡城跡の一画で、今回の調査で初めて姿を現しました。

本報告書は、ホクチヤ遺跡の発掘調査成果をまとめたものです。本書が県民の皆様にとって郷土の歴史を理解する一助になるとともに、各方面において広く御活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から報告書作成に至るまで、多大なる御協力をいたしました栃木県県土整備部、佐野市教育委員会をはじめとする関係機関、並びに関係各位に対しまして、厚くお礼申し上げます。

令和元年6月

栃木県教育委員会

教育長 荒川 政利

例 言

- 1 本書は、快速で安全な道づくり事業費（補助）一般県道佐野環状線黒崎工区に伴い実施したホクチヤ遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本事業は、栃木県教育委員会から公益財団法人とちぎ未来づくり財団が委託を受けて、財団の埋蔵文化財センターが実施した。事業の実施に当たっては、県教育委員会からの指導のもとに行なった。
- 3 調査体制は以下のとおりである。

発掘調査

平成 30 年度 副所長 藤田典夫、調査課 副主幹 中村亨史、副主幹 龍田幸久

嘱託調査員 加藤俊樹

整理・報告書作成

平成 31 年度（令和元年度） 副所長 藤田典夫、整理課 副主幹兼課長 津野 仁

- 4 本報告書の執筆・編集は津野が担当した。
- 5 表土除去業務については、神谷建設株式会社に委託した。
- 6 基準点測量・杭設置、及び航空写真撮影業務については、中央航業株式会社に委託した。
- 7 火山灰分析業務については、株式会社火山灰考古学研究所に委託した。
- 8 本遺跡の発掘調査・整理報告に当たり、下記の機関に御指導・御協力を頂いた。厚く御礼の意を表します。
国土整備部・安足土木事務所・佐野市教育委員会
- 9 発掘調査の参加者は次の通りである。
五十嵐祐子・大久保保江・児玉祐美子・熊倉洋子・島谷義博・菅谷宣義・杉原新一・須藤由紀夫・瀬下勇夫・五月女貴之・田村秀実・富田 博
- 10 整理作業・報告書作成の参加者は次の通りである。
杉山真理
- 11 本遺跡の調査概要は、埋蔵文化財センター年報・栃木県埋蔵文化財保護行政年報で報告されているが、本書を正式報告とする。
- 12 本遺跡の出土遺物・資料類は、栃木県埋蔵文化財センターで保管している。

凡 例

- 1 遺跡の略称は、佐野市ホクチヤ遺跡を略した S N - H K である。
- 2 遺構の略称は、S I : 積穴住居跡、溝跡・堀 : S D、S K : 土坑である。
- 3 全体図の座標は、世界測地系に基づき、図示した方位は座標北である。
- 4 遺構の縮尺は、積穴住居跡・土坑 1/80、溝跡 1/80・1/100、カマド 1/40 で、スケールを示したので、参照されたい。
- 5 遺物の縮尺は、縄文土器 1/3、石器 1/3・2/3、土師器・須恵器は 1/4、銅製品・鉄滓・砥石は 1/2 であり、縮尺を図面の脇に示した。
- 6 遺構・遺物実測図中のスクリーントーンについて、三彩陶器以外は、以下の通りである。

焼土	■■■	黒色処理	■■■
----	-----	------	-----
- 7 土器実測図の器面調整のうち、ナデは破線、ケズリは実線で示した。
- 8 遺物観察表の色調は、『新版 標準土色帳』農林水産省農林水産技術会議事務局監修 財團法人日本色彩研究所 色票監修による。大きさの () は復元径である。
- 9 遺物番号は挿図中の番号・写真図版中の番号に一致する。

目 次

序	
例 言	i
凡 例	ii
目 次	iii
第 1 章 調査の経緯	1
第 1 節 調査に至る経緯	1
第 2 節 調査の方法	3
第 3 節 調査の経過	3
第 2 章 遺跡の環境	5
第 1 節 地理的環境	5
第 2 節 歴史的環境	7
第 3 章 発見された遺構と遺物	12
第 1 節 調査の概要	12
第 2 節 旧石器・縄文時代	14
(1) 縄文土器	14
(2) 石器	15
第 3 節 古代・中世	17
(1) 壺穴住居跡	17
(2) 溝跡・堀跡	27
(3) 土坑	28
第 4 章 総括	35
第 1 節 ホクチヤ遺跡 壺穴住居跡の時期と性格	35
(1) ホクチヤ遺跡 壺穴住居跡の時期	35
(2) 周辺遺跡と人工集落	36
第 2 節 多彩釉陶器	39
(1) 最終的な使用時期	39
(2) 出土遺跡の性格	40
第 3 節 堀跡と黒荷藤岡城跡	42
付編	44

挿図目次

第1図 ホクチヤ遺跡位置図	1	第16図 S I - 03d 実測図	20
第2図 ホクチヤ遺跡の範囲と調査位置	2	第17図 S I - 03d 出土遺物実測図	21
第3図 試掘トレント位置図	2	第18図 S I - 04 実測図	23
第4図 ホクチヤ遺跡グリッド区割図	3	第19図 S I - 04 出土遺物実測図(1)	23
第5図 ホクチヤ遺跡の位置と周辺の地形	5	第20図 S I - 04 出土遺物実測図(2)	24
第6図 ホクチヤ遺跡周辺の遺跡分布図(古代と城跡)	8	第21図 S I - 12 実測図・出土遺物実測図	26
第7図 ホクチヤ遺跡近隣の遺跡分布図	9	第22図 S D - 03a・b 実測図・出土遺物実測図	29
第8図 ホクチヤ遺跡 基本土層	12	第23図 S D - 07a・b 実測図・出土遺物実測図	31
第9図 ホクチヤ遺跡全図	13	第24図 土坑実測図・出土遺物実測図	33
第10図 石器文様実測図	14	第25図 ホクチヤ遺跡 穴穴住居の構造と近隣の塁跡	36
第11図 石器実測図	16	第26図 馬持台遺跡 平安時代堅穴住居変遷図(1)	37
第12図 S I - 01 実測図	17	第27図 馬持台遺跡 平安時代堅穴住居変遷図(2)	38
第13図 S I - 01 出土遺物実測図	18	第28図 新木戸出土の多彩粒陶器	41
第14図 S I - 03c 実測図	19	第29図 薄市遺跡の仏教関係遺物	41
第15図 S I - 03c 出土遺物実測図	19		

表目次

第1表 ホクチヤ遺跡周辺の遺跡一覧	9	第6表 S I - 12 出土遺物觀察表	27
第2表 S I - 01 出土遺物觀察表	18	第7表 S D - 03a・b 出土遺物觀察表	30
第3表 S I - 03c 出土遺物觀察表	19	第8表 S D - 07a・b 出土遺物觀察表	32
第4表 S I - 03d 出土遺物觀察表	21	第9表 S K - 05 出土遺物觀察表	33
第5表 S I - 04 出土遺物觀察表	24	第10表 S K - 11 出土遺物觀察表	33

図版目次

図版一 道路遺跡一	S I - 12 セクション(西から)
ホクチヤ遺跡遺構(南西から)	S I - 12 北カマド(南東から)
ホクチヤ遺跡遺構(東から)	S I - 12 北カマド(南から)
図版二 道路遺跡二	S I - 12 東カマド(東から)
石器名目と遺跡遺構(南西から)	S I - 12 東カマド(南西から)
ホクチヤ遺跡遺構地図全県(上空から)	S I - 12 実測(北西から)
図版三 遺構一	図版六 遺構四
S I - 01 実測(東から)	S I - 12 東カマド(南西から)
S I - 01 セクション(東から)	S K - 05 セクション(西から)
S I - 01 遺物出土状況(南から)	S D - 03a・b セクション(西から)
S I - 01 三彩陶器出土状況(西から)	S D - 07a セクション(南から)
S I - 01 実測(南から)	S D - 07a 実測(北西から)
S I - 01 セクション・遺物出土状況(西から)	図版七 遺物一
S I - 01 P - 2 遺物出土状況(西から)	精工文器・石器1~9
S I - 01 カマド(南から)	図版八 遺物二
図版四 遺構二	石器10~17
S I - 03c セクション(南西から)	S I - 01 - 1・2・3・4・6・7・9
S I - 03c カマド底(南から)	S I - 03c - 1
S I - 03d 実測(南東から)	図版九 遺物三
S I - 03d カマド(南から)	S I - 03d - 1・2・3・4・6・7・8・9・10
S I - 04 炭化物出土状況(南西から)	S I - 04 - 1・2・3・5・8・9・10
S I - 04 カマド(南から)	S I - 12 - 1・2・3・4・5
S I - 04 カマドセクション(東から)	図版十 遺物四
S I - 04 遺物出土状況(南西から)	S I - 04 - 7・11
図版五 遺構三	S I - 12 - 7・8
S I - 04 遺物出土状況(南から)	S D - 03a - 1・3・5・7
S I - 04 須恵器陶器出土状況(南から)	S D - 07a - 1・2
S I - 12 実測(南から)	

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯(第1～3図)

佐野市は、栃木県の南西部にあって、この地域で足利市に次ぐ規模の市となっている。平成17年(2005)には、旧佐野市と田沼町・葛生町が合併して、新佐野市となった。交通では、南北に東北自動車道、東西に北関東自動車道が佐野市と接する旧岩舟町域で交差し、市内には佐野藤岡、田沼のインターチェンジがあり、国道50号が佐野藤岡インターチェンジに接続することからも、物流・製造などの拠点となっている。この周囲に商業施設もあり、発展し続けている。交通アクセスの利点によって、佐野市域は今後も経済的な展開が期待されている。

一般県道270号佐野環状線は佐野市街地を巡る路線で、佐野市の都市交通網の中核となる道路である。昭和48年(1973)に制定され、総延長5,709mに及ぶ、他の県道と重複しており、県道7号佐野行田線・16号佐野田沼線・75号栃木佐野線・141号唐沢山公園線と重なる。今回調査を行なった工区の近くには、佐野新都市開発事業として、町谷地区に佐野みかも台産業団地、西浦・黒持地区に佐野インター産業団地、高萩・越名地区にサザンクロス佐野の3地区の開発が進み、商業・産業などの展開が期待されている。また、今回の工区は、東北自動車道佐野藤岡インターチェンジ、佐野サービスエリアスマートインターチェンジに近接し、地域住民への利便性向上や地域の活性化なども期待されている。

改良工事は、栃木県土整備部・安足土木事務所が担当し、今回調査を実施する部分の工事は、全面切土により土地を平坦化することを計画していた。このことを県教育委員会文化財課に照会したところ、この場



国土地理院発行「佐野」「下野藤岡」(1:25,000)を改変

0 1:30000 1500m

第1図 ホクチヤ遺跡位置図

所には周知の文化財包蔵地であるホクチヤ遺跡が所在しており、県教育委員会は遺跡の有無・内容を把握するために確認調査を行うことになった。

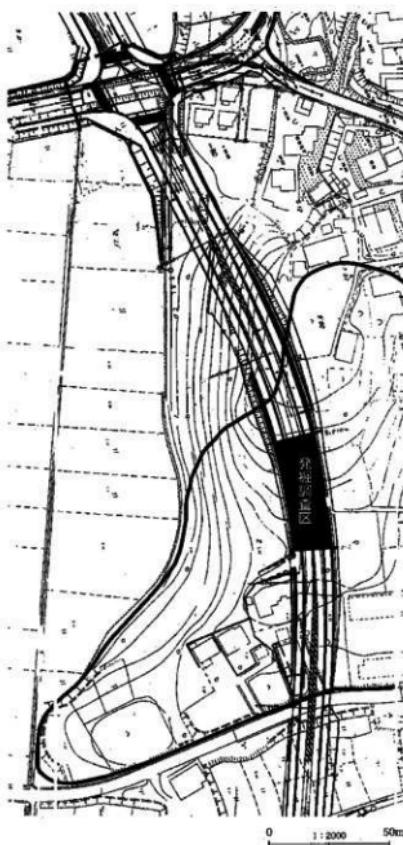
県教育委員会文化財課は平成26年9月に、事業予定地においてトレンチ4本を設定し、遺構・遺物の確認調査を行った。その結果、調査地北側に設けたトレンチ1・2において、豊穴住居跡や溝跡・土坑などが確認されたので、これらのトレンチより南側の台地部は広範囲に集落跡が広がっていると判断出された。このため、道路建設事業の実施前に、発掘調査を要することになった。

このような開発計画と確認調査結果を踏まえて、県教育委員会文化財課と県土整備部の協議を経て、平成30年度に現地発掘調査を実施することになった。9月25日付けで、文化財課長から公益財団法人とちぎ未来づくり財團理事長にホクチヤ遺跡発掘調査の費用見積りが依頼された。これを受けて財團理事長から文化財

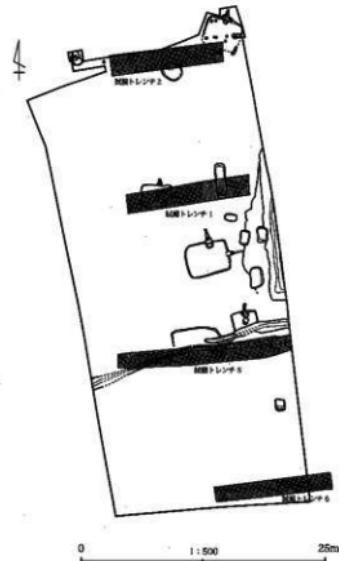
課長に同日費用見積りの回答がなされた。

さらに、10月1日付けで、文化財課長から財團理事長に契約締結の依頼文書が送付され、栃木県知事と財團理事長間で埋蔵文化財発掘調査業務委託契約書が締結された。10月には諸準備を行い、現地における発掘調査は11月から12月に実施することとした。

平成31年度は4月1日付けで、文化財課長から財團理事長に見積依頼があり、同日業務委託契



第2図 ホクチヤ遺跡の範囲と調査位置



第3図 試掘トレンチ位置図

約書を締結した。業務は整理作業を行い、これまでの発掘調査結果を報告書として刊行することにした。

第2節 調査の方法（第4図）

調査は道路工事による範囲を行うために、細長くなっている。路線部分の北側、旧越名沼から台地に上る部分は既に道路の掘削工事が進んでおり、掘削の及んでいない部分の北側を調査地として、その南側を堆土置き場とした。表土除去は重機により、ソフトローム面まで掘削した。

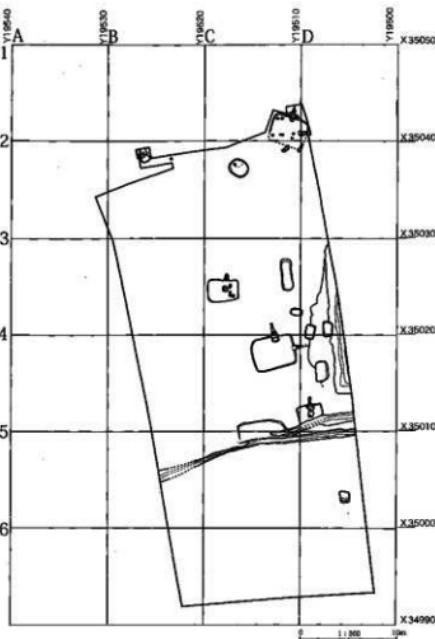
遺構確認面までの深さは40～50cm程度であり、遺構確認とともに公共座標杭打設を業者委託によって行った。なお、グリッド杭は10m方眼として打った。

確認した遺構には番号を付すが、その番号は遺構の種類を分けずに通し番号とした。遺構確認全体図は、現地で簡易な方法で作成し、調査終了後により精度の高い図を作った。

豎穴住居跡は土層観察用ベルトを十字形に2本か1本のみ設定して覆土を掘り下げた。土坑などは覆土を半裁して、土層を観察した。溝跡などと遺構が重複している場合には、複数の遺構を通して観察用ベルトを設定した。覆土を掘り下げて除去した後に、土層の観察結果を基に図面を作成した。土層は、色調や包含する物を観察して、含有量や結りや粘性を記録した。

平面図については、調査地に1m方眼の糸を張り、簡易な造り方実測とし、調査地全体を分割して実測した。カマドは、遺存状況に応じて、調査・記録方法を変えて行い、煙道部の長軸・短軸方向で土層や断面を記録した。

写真撮影は遺構・遺物出土状況・土層等について、デジタルカメラで記録した。さらに、調査終了後には、航空写真撮影を行った。また、地山を一部深掘りして、ロームなどの堆積状況を確認した。



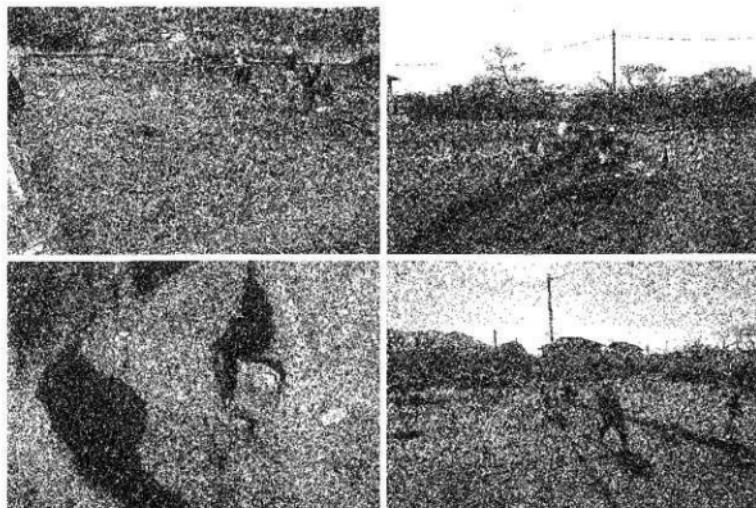
第4図 ホクチヤ遺跡グリッド区割図

第3節 調査の経過

平成30年10月中旬は、調査の立ち上げ準備を行い、現地調査は11月1日から行った。7日までは調査地の伐採整備を実施し、同日から表土の掘り下げを、12日から14日までは重機により表土除去を行った。

15日から21日までは遺構確認を行い、この間に全体図を作成し、遺構確認の時に出土した遺物については出土地点を記録した。

第1章 調査の経緯



21日からは、遺構の掘り下げ作業になり、S I - 01から調査を開始した。以下、主な遺構の調査経過を示す。S I - 01は12月18日まで、SD - 03は11月28日から12月25日まで、S I - 04は11月29日から12月20日まで、SD - 07は12月10日から25日まで、S I - 12は12月21日から27日まで、S I - 03dは12月21日から27日まで、掘り下げ・土層記録・遺物出土状況図作成や写真撮影・カマド調査・完掘写真撮影・平面図作成・断面図作成などを行った。

航空写真撮影は、その準備を12月25日に行い、26日にラジコンヘリにより、デジタル写真撮影を実施した。また、27日には調査区全景写真を撮影し、レベリング作業も行った。同日、作業終了後に機材を搬出し、現場から撤収して、現地における発掘調査を終了した。

整理作業は、平成31年4月当初から実施した。作業は、取り上げてきた遺物の洗浄、接合から始まり、注記して、出土位置を記録した。各遺構から代表的な遺物を選定して実測・トレース、図版作成を行った。遺構は、デジタルトレースして図版を作成し、5月から原稿作成・遺物写真撮影などを行った。その後、遺構図・遺物図と文章などを編集して入稿、校正して、報告書刊行の運びとなった。さらに、遺物や記録類の収納作業を行って、本遺跡の整理・報告書刊行作業が終了した。

第2章 遺跡の環境

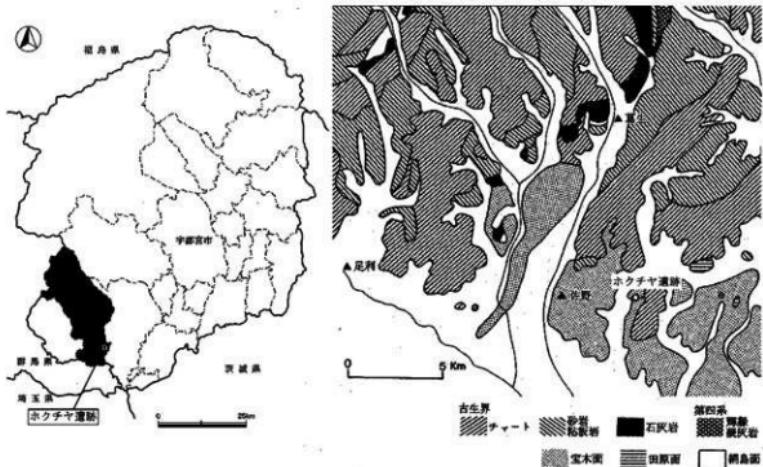
第1節 地理的環境 (第5図)

栃木県は、関東地方の北部に位置し、その中央部は平野が南北に広がる。東西は山地であって、山地と平野部の面積は2対1ほどである。県の西側には、足尾山地など標高の高い山が連なり、対照的に東側は八溝山地と呼ばれる低い山地がのびている。東西の山地に挟まれた平野は、関東平野の北縁で、平野北部は主に丘陵地、南部は洪積台地と沖積地となっている。

佐野市は、県の南西部、足尾山地南縁部が平野部に接する地域になっている。県の南端で、南は群馬県館林市や板倉町と渡良瀬川を挟んで接している。河川は、足尾山地から流れ出る秋山川を中心に、東に三杉川、西に才川・旗川・出流川が南流し、いずれも渡良瀬川に注いでいる。三杉川から渡良瀬川との間には、越名沼が存在していたが、干拓工事でなくなった。

佐野市の台地は、これらの河川で浸食された間にあり、秋山川と三杉川の間に佐野台地があり、現在の佐野の市街地となっている。市街地の北側は足尾山地となっており、本遺跡の北側1kmほどで山地となっている。一方、三毳山の東側は旧岩舟町小野寺の盆地から開ける台地となっている。ここでの台地は浸食された谷によって、三毳山の西側よりも地形が複雑である。この山の東側には、岩船山麓を源とする蓮花川が蛇行して南下し、渡良瀬川に至っている。

ホクチヤ遺跡は佐野市の東端の黒袴町に所在する。黒袴町は東に三毳山が南北に連なり、西側には先述の旧越名沼の低地がある。この低地には現在も三杉川が、旧岩舟町の盆地から南流して本遺跡の西側に流れている。三毳山は標高229mで、足尾山地の南端になり、ここから南は関東平野となっている。山地の先端であることから、平野の遠方からも位置を確認することができる。



第5図 ホクチヤ遺跡の位置と周辺の地形

第2章 遺跡の環境

三毳山から西側の遺跡近傍をみると、山地の斜面を降りると、緩傾斜の台地となっている。台地は旧越名沼が西側にあったことから南北に長くなっている。この台地を三毳山から西に流れる小支谷があつて、南北台地を切断している。ホクチヤ遺跡のある台地は、東北自動車道佐野サービスエリアの所が最も高い位置になり、ここから南西に台地が伸びている。この先端に遺跡は所在する。さらに近傍では、この南西台地は今回の調査地より北側が最も高くなってしまい、南側に向かう斜面地の先端を調査した。さらに、この台地の南側には山麓から西に向かう低地部となる谷が入っており、谷の南側の台地と切断されている。このため、本遺跡の範囲は分布調査の結果、三角形気味の範囲となっている。



ホクチヤ遺跡周辺の地形写真（上段：南から 下段：北から）

第2節 歴史的環境（第6・7図、第1表）

ホクチヤ遺跡では、旧石器時代の石器、縄文時代早期・前期・中期・後期の土器・石器、古代の集落跡、中世から戦国時代の堀跡が発見された。このため、これらの時代のうち、比較的多くの遺物・遺構等が確認された縄文時代・古代・中世から戦国時代について近隣の歴史的な様相について概観する。

縄文時代では、本遺跡の南に隣接する黒持台遺跡において、早期の攢糸文から後期までの土器が出土している。このうち8割ほどが早期の土器であり、本遺跡で最も古い田戸下層式や降って茅山上層式とみられる土器も黒持台遺跡で多量出土している。この時期には黒持台遺跡が中核的な集落であったと推定される。早期の土器は、旧越名沼を挟んで対峙するゴロノミヤ遺跡でも少量出土しているが、黒持台遺跡に比べて格段に少ない。

前期になると竪穴住居が旧越名沼周辺の遺跡で多数確認できるようになる。本遺跡に近い三毳山西麓の遺跡でも黒持台遺跡・ムジナ塚遺跡・ヘビ塚遺跡において黒浜式期の住居跡が多数確認されている。また、旧越名沼を挟んだ佐野台地の東縁においても黒浜式期の住居跡などが発見されている。特に、佐野新都市関連での調査では、ホクチヤ遺跡から南西に2.5kmほど離れた位置にあるエグロ遺跡では黒浜式期の住居跡が14軒、諸葛C式期の住居跡が1軒確認された。佐野新都市関連の調査では、上述の遺跡の他に上林遺跡・下林遺跡・松山遺跡でも住居跡が発見された。これらの調査成果について、出居 博氏がまとめており、この時期の集落規模拡大を説いている（出居 2004）。また、佐野台地東縁から少し西で、台地の奥に入った位置にある佐野市工業住宅団地内遺跡でも黒浜式土器などが確認されている。縄文前期には、海進の最盛期であって、旧藤岡町や野木町などで貝塚が作られ、藤岡神社遺跡や篠山貝塚なども確認されている。旧越名沼周辺は、海進の後背地であったと考えられる。このような環境の変化によってこの周辺に前期の集落が多く形成されたと想定される。

本遺跡では中期や後期の遺物も散見された。佐野新都市関連の調査でも後期の遺跡は多くて、四ツ道北遺跡では後期前半の住居跡など、下林遺跡では同じ時期の土坑などが、エグロ遺跡では埋甕が確認されているが大きな集落ではない。本遺跡に隣接する黒持台遺跡では、少量の中後期後半から後期前半の遺物が発見されており、ホクチヤ遺跡と同じような傾向を示している。一方、本遺跡から南西に3.5kmほどの位置にある馬門南遺跡では中期後半から後期前半の遺物が大量に発見され、この時期の地域における中核的な遺跡と言えるであろう。旧越名沼周辺の集落は出居氏の変遷図にもあるように中期から低調であり、後期にも比較的小規模な遺跡が多い傾向がある。

越名沼周辺にも弥生時代の遺跡は散見しており、古墳時代前期には松山古墳で前期の前方後方墳、馬門南遺跡で前方後円墳が作られる。近接した地域の中で墳形が異なっており、地域的に政治史を考える上で注目される。後期の群集墳は黒持台遺跡で一つの台地上にある全ての古墳を調査しており、成果が上がっている。また、ヘビ塚遺跡・ムジナ塚古墳群などでも後期古墳群があつて、三毳山西麓が墓域として使われていたことがわかる。

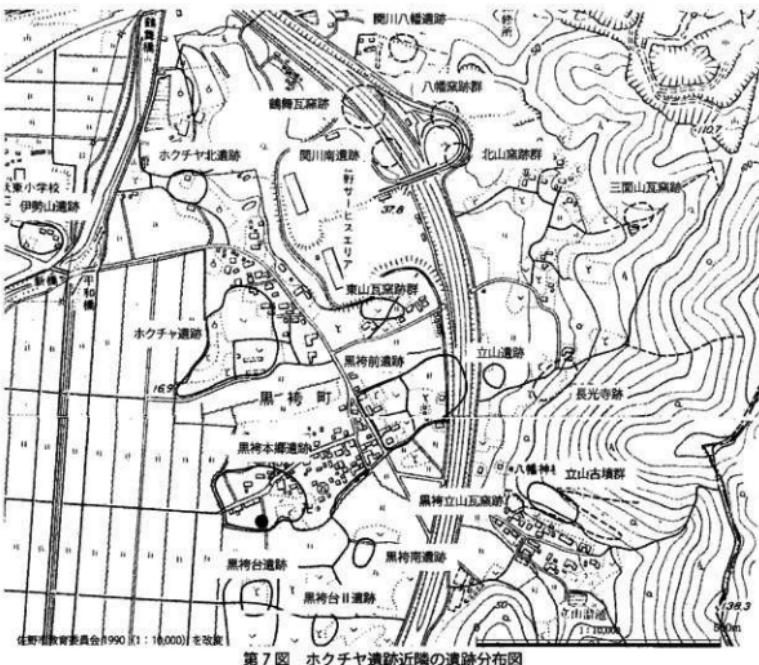
奈良・平安時代になると、本遺跡では竪穴住居が作られて本格的な集落が始まり、最も活気を呈した時期である。そこで、周辺における奈良・平安時代の遺跡について、遺跡分布図を示してみる。発掘調査を行っていない遺跡では、当該期遺物の散布するものを含めて集落跡とみなして示した。その結果、三毳山の西側に当たる佐野市城、佐野台地東部及び旧越名沼（現三杉川）東側の三毳山西麓の南北に狭い台地上において集落遺跡が多く確認できた。佐野台地では市街地で遺跡の分布確認が困難な所もあるが、台地東部では、伊勢山町・米山村・犬伏下町に遺跡のまとまりがみられる。ここは、三杉川が小野寺の盆地を抜けて、三毳山根



第6図 ホクチヤ遺跡周辺の遺跡分布図(古代と城館跡)

第1表 ホクチヤ遺跡周辺の遺跡一覧

番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	人芝原遺跡	11	大前御宿道路脇	21	西口賣道路
2	坂光沢遺跡	12	ホクチヤ遺跡	22	社口賣道路
3	小毛路十一所遺跡	13	黒持台遺跡	23	因造道路
4	三面窓跡	14	新町遺跡	24	向道跡
5	和田窓跡	15	西根2遺跡	25	後藤南遺跡
6	町谷瓦窓跡群	16	馬門南遺跡	26	ゴロノミヤ遺跡
7	八幡宮跡群	17	中ノ内遺跡	27	赤城神社境内遺跡
8	北山窓跡群	18	中央遺跡	28	鹿折山城
9	鶴舞瓦窓跡	19	豊岡遺跡	29	大崩山城
10	東山瓦窓跡群	20	長峰遺跡	30	馬神藤岡城跡



第7図 ホクチヤ遺跡周辺の遺跡分布図

から西に流れて、越名沼に入る位置の西岸に当たる。近世以降の越名沼は鎌塚町付近までが沼であって、その北側は低地となっていた。しかし、古代の遺跡分布をみると、鎌塚町付近に集落は少なくて、その奥の方に集落がまとまっている。戦国期に豊臣秀吉が小田原攻めの際に提出させた絵図の控えという下野国絵図にも西浦・鎌塚まで沼があるが、黒持では川になっている（佐野市郷土博物館 2015）。江戸時代の作とされる佐野御領分御領入交絵図では黒持村まで沼が描かれている（佐野市郷土博物館 1994）。明治時代には越名沼は鎌塚町付近まであって、ここに村が発達したが、古代では集落分布からみると、伊勢山町付近までの奥まで沼が入っていた可能性がある。

三毳山の西裾の台地では、西に下る谷で切断されて沼に突出した小台地の各所に集落が展開していることがわかる。これらの遺跡は小規模な台地のために大きな集落とはなっていないが、南北に連なっており、沼の対岸で鎌塚町付近の集落分布と対照的である。三毳山裾の小規模集落が展開する地勢的要因や生業など經濟的な要因の解明が待たれる。

また、集落分布をみると、渡良瀬川と越名沼入り口の合流点に当たる越名町・馬門町・飯田町・高山町付近に当該期の遺跡がまとまっている。これらは台地の東縁や南縁に立地しており、水運などの交通的な利便性を背景として形成された集落群とみることも可能であろう。

本遺跡周辺で発掘された遺跡のうち大規模な遺跡は越名沼・渡良瀬川合流点に近い馬門町の馬門南遺跡、越名沼中位で鎌塚町のゴロノミヤ遺跡、越名沼の奥部に所在する佐野市工業住宅団地内遺跡（第1次調査）・新町遺跡などである。

近隣の遺跡以外の歴史的な環境としては、本遺跡は現在の郡境付近であって、古代において本遺跡周辺は都賀郡か安蘇郡であったのか判然としない。参考に、江戸時代には三毳山北側は安蘇郡であった。それぞれの郡家は確定していないが、佐野市並木町の館之前遺跡で瓦が多く出土しており、「安」（安蘇郡名の頭文字か）銘墨書土器などが出土しており、候補地の一つに挙げられるであろう。ここは秋山川に近いで水運にも至便で、東山道の推定ルートに近い位置でもある。また、東山道推定ルートよりも南になり、安蘇郡域でも南端になる植下町の赤城神社境内遺跡では古代瓦が多く出土しており、郡家の候補地に挙げられている。

本遺跡付近の推定東山道ルートは、佐野市の堀米から犬伏に抜ける例幣使街道から関川の丘陵を登り、新里に行き、疊岡遺跡の駅家に至るとする見解がある（木本 1992）。この説に従えば、佐野台地北東部集落群の北側を通っていたことになり、本遺跡から北に 1.1km ほどの位置を通っていたことになる。

本遺跡の周囲には、窯業遺跡がまとまって確認されている。三毳山麓窯跡群と呼ばれており、7世紀頃から平安時代の9世紀まで継続的に操業している。その分布は、三毳山の北西端に当たる黒袴町域から北麓の町谷町、さらに北側の関川町から塙川町、北にのびては板木市（旧岩舟町）の山間部まで窯が作られている。主な窯跡の調査成果を概観すると、本遺跡に最も近くて、東に 200m ほどの位置にある東山瓦窯跡群は下野国分寺跡の瓦編年では 790 年代から 9 世紀第 1 四半期に位置付けられており（大橋 1997）、本遺跡が営まれた時期と近い時に瓦生産が行われている。遺跡は窯跡と近距離にあり、時期的に併行していることから、相互の関連が注目される。また、本遺跡から 400m ほど離れたサービスエリアのある所では 9 世紀後半に鶴舞瓦窯跡が操業している。これらの遺跡は、地形的に三毳山裾から台地でつながっている。窯跡に隣接する集落遺跡では、黒袴前遺跡とホクチヤ遺跡が最も近くに所在しており、窯跡との関連が想定される。さらに、黒袴前遺跡では 9 世紀後半に位置付けられる繩叩きで離れ砂を用いている平瓦や均整唐草文の宇瓦が出土しており、近隣でのこの時期の瓦生産を示唆する。

本遺跡が営まれる時期の三毳山麓窯跡群全体の動向との関連では、9世紀代には本遺跡の北側 2.9km ほどの位置にある弥三郎ヶ沢窯跡やさらに北にある旧岩舟町域の寂光沢窯跡や大芝原窯跡・日陰沢窯跡・淨淋寺裏山窯跡などで須恵器や少量の瓦生産を行っている。このように、本遺跡の東側の三毳山麓や北側の山間部では窯業生産が盛んであった。これらの窯跡群の操業に関しては、国分寺創建の時から国衙が瓦生産に関与し、国衙工房として造瓦所の成立・整備が行われたという説（大橋 1997）、郡負担の瓦生産から國による瓦生産に変化し、国分寺創建期よりも 9 世紀代に国衙の関与が強まったという説（津野 2011）がある。このように、本遺跡が瓦生産や須恵器生産を行う窯跡に最も近い集落遺跡であることからすると、国衙との関わりなども推測することができる。

次に、三毳山の南側では製鉄遺跡が展開する。ここでの鉄生産の開始は7世紀末か8世紀始め頃で北山窯跡の一画で製鉄に使用する炭を焼いている。その後、製鉄遺跡は三毳山南側の旧藤岡町域、蓮花川流域で台地を侵食した小支谷の斜面に製鉄炉が築かれ、大前製鉄遺跡群と呼ばれ（津野2003）、8世紀後半頃から10世紀前半頃までの操業と推測されている。

中世から戦国期には、本遺跡を含めた地域では、黒持藤岡城が築かれる。佐野氏の一門である藤岡氏が移住する。文明13年（1481）に藤岡佐渡守秀行が上野国緑野郡藤岡からこの地に移封された。その後、房重・房行・政國・秀清まで66年間居城して、その後旧地に戻った。藤岡氏の後には佐野氏の家臣である大貫大隅守政重が入り、孫の越中守政宗の時、天正13年（1585）に小田原北条氏と戦い、敗北・廃城となったという（佐野市史編さん委員会1975）。

戦国期の佐野氏の動向を概観すると、16世紀後半の佐野昌綱や宗綱の代には、北関東の要衝であったこの地を巡り、相模の北条氏、越後の上杉氏が進出を図って戦いが繰り返されていた。永禄3年（1560）上杉氏は関東に出手を始め、唐沢山城で北条と上杉が交えている。翌年、上杉は小田原を攻め、その後永禄5・6・7・10年に唐沢山城を攻めている。このような環境で唐沢山城は堅固に石垣が築かれ、周辺に支城が造られる。天正14年（1586）には北条氏康の六男氏忠が佐野氏の養子となって、唐沢山城は小田原城の支城という位置付けがなされ、天正18年の小田原攻めまで北条氏の領国となる。

佐野市域には、多数の山城や平城が残り、石垣を造るものも存在する。これらの城群について、茂木孝行氏は情報伝達の城、支城網があったと指摘している（茂木2017）。佐野氏の家臣団が唐沢山城の支城に居て、黒持藤岡城も支城ネットワークに組み入られていた可能性がある。

参考文献

- 出居 博 2004「越名沼周辺遺跡の時代的変遷」「四ツ道北遺跡」佐野市教育委員会
- 大橋泰夫 1997『下野国分寺跡XⅡ瓦・本文編』栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団
- 木本雅康 1992『下野国都賀・河内両部における古代駅路について』『栃木史学』第6号
- 佐野市教育委員会 1990『佐野市遺跡地図』
- 佐野市郷土博物館 1994『第22回企画展 越名・馬門河岸展』
- 佐野市郷土博物館 2015『上杉謙信がやってきた』
- 佐野市史編さん委員会 1975『佐野市史 資料編1』佐野市
- 津野 仁 2003「大前製鉄遺跡群」「藤岡町史 資料編 考古」藤岡町
- 津野 仁 2011『寂光沢窯跡』栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団
- 栃木市教育委員会 2015『栃木市遺跡分布地図』
- 茂木孝行 2017『唐沢山城をめぐる佐野市の城館跡』『佐野の城館跡—唐沢山城とその支城—』佐野市郷土博物館

第3章 発見された遺構と遺物

第1節 調査の概要(第8・9図)

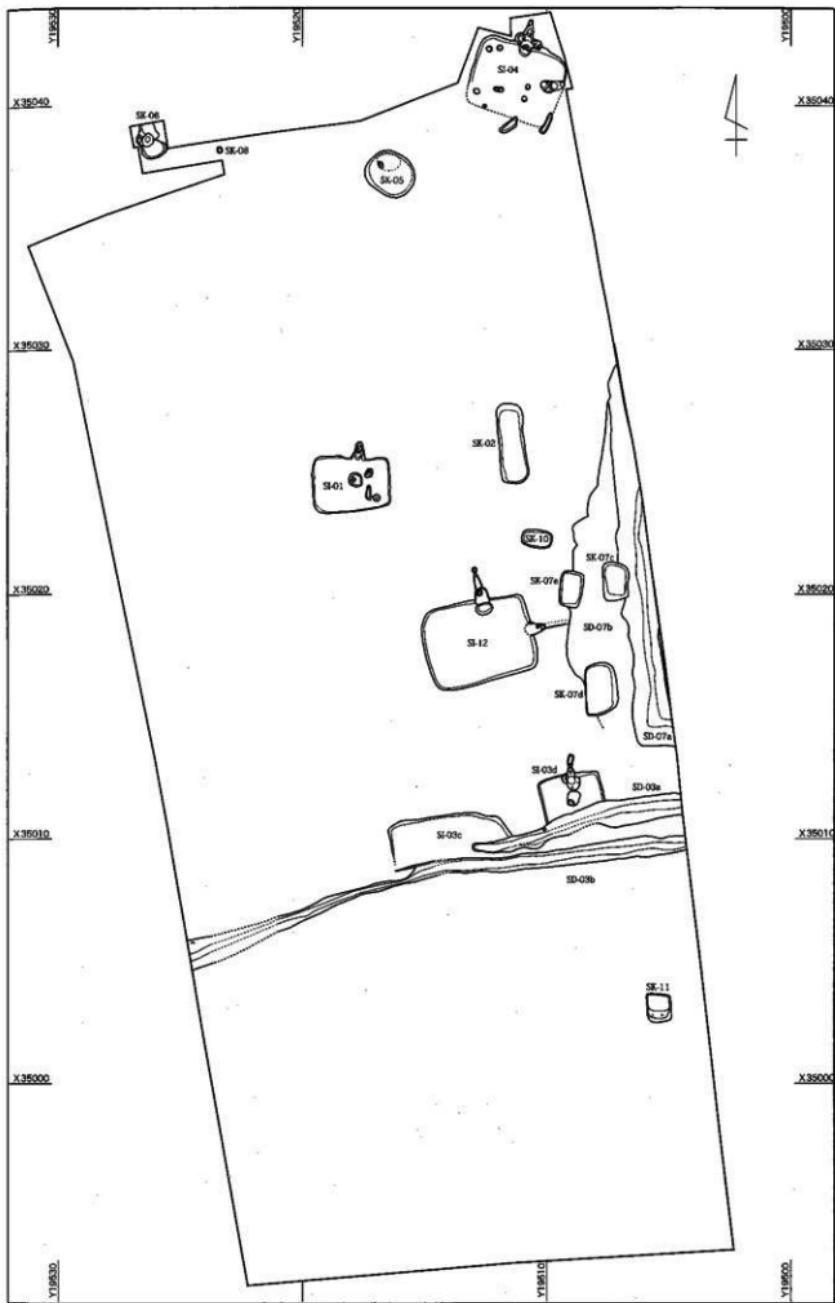
ホクチヤ遺跡は、三義山から西側に降った台地の西端に立地し、遺跡の西側はかつての越名沼である。その比高差は10mにも及び、急な崖面となっている。元の沼の部分から台地上に県道路線が北西から南東・南にのびていき、この台地上を調査した。周辺の地形は小さな沢が樹枝状に入り、遺跡の北側・東側にも沢が入っており、調査地の北側の隣接地は最も高い部分になっている。この最高所から南側に向かって傾斜する部分にホクチヤ遺跡は所在する。

調査の結果、古代の堅穴住居跡5軒、古代以降の土坑10基、溝跡(掘跡)4条が発見された。調査した位置は、ホクチヤ遺跡の中央やや西寄りの台地端であり、確認された住居跡は散在していた。遺跡中心部により近い、調査地東半分に住居跡が存在することから、遺跡範囲の中央部に向かって住居跡が多く存在すると想定される。堀跡は、この近くに想定されていた黒袴藤岡城跡の堀と考えられる。時期的にはロクロ使用かわらけが出土したことから、中世から戦国期のものと推測される。

ここで、本遺跡の基本土層について触れておく。調査の南北端で3箇所の深掘りを行い、深掘りトレンチ1では現表土から深さ70cmの位置で、約2万年前後(浅間大塙沢灰石群)や約1.5~1.65万年前の浅間岩鼻黄色輕石とみられる輕石が確認された。また、深掘りトレンチ2でも表土から深さ40cm程で同様の輕石が確認された。



第8図 ホクチヤ遺跡 基本土層



第9図 ホクチヤ遺跡全体図

0 1:200 5m

第2節 旧石器・縄文時代

本遺跡の調査で、旧石器時代・縄文時代の遺構は発見されなかったが、遺構確認中や古代の堅穴住居跡掘り下げ中に当該期の遺物が出土したので報告する。

(1) 縄文土器 (第10図、図版七)

縄文土器は、早期から後期までの破片が確認されたので、群分けして提示する。

1群 早期 田戸下層式土器 (1)

口縁端部は外削ぎ状。口縁部に沿い3条の沈線、以下には太めの縦位の短い沈線を施す。S I - 04 出土。

2群 早期 茅山(上層か)式土器 (2~5)

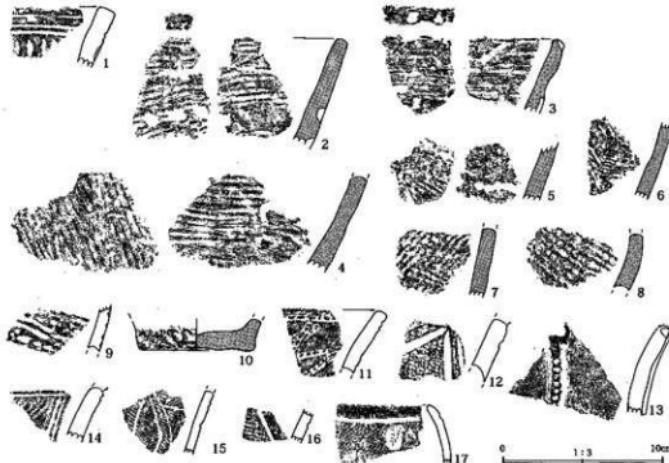
2・3は内外面に横位の条痕を施す口縁部破片。3は端部にキザミを持つ。いずれも口縁端部に条痕がみられる。4は胴部破片で、外面は斜め、内面は横位の条痕をもつ。5は条痕浅く、曲線が少なく平面的なため、底部の可能性もある。これらは、アルカ属の貝殻条痕と考えられる。胎土に纖維を含む。2・4はS I - 04、3はS K - 06、5は試掘トレンチC 2区出土。

3群 前期 黒浜式土器 (6~10)

6は貝殻背压痕を施した後に細い沈線による格子目文がみられる。7は縄文のみが施される胴部片、原体は2段L R・R Lを横方向に羽状に施す。8の原体は1段Rを横方向に施す。9は複数本の棒状工具による横位の波状文及び押引文がみられる。10は底部破片、原体は2段R Lを横位施文、底部外面はミガキを施す。胎土に纖維を含む。6はS K - 06、7はC 2区、8はS I - 04、10はS K - 07 出土。

4群 前期 諸磯式土器 (11)

細めの半截竹管による平行沈線上に同様の工具による爪形文を施し、鋸歯状・木葉状モチーフを施している。S I - 04 出土。



第10図 縄文土器実測図

5群 中期 加曾利E式土器（12）

2段LRを斜めに施した後に、太めの沈線による懸垂文がみられる。遺跡調査地の北西で出土。

6群 後期 堀之内式土器（13～16）

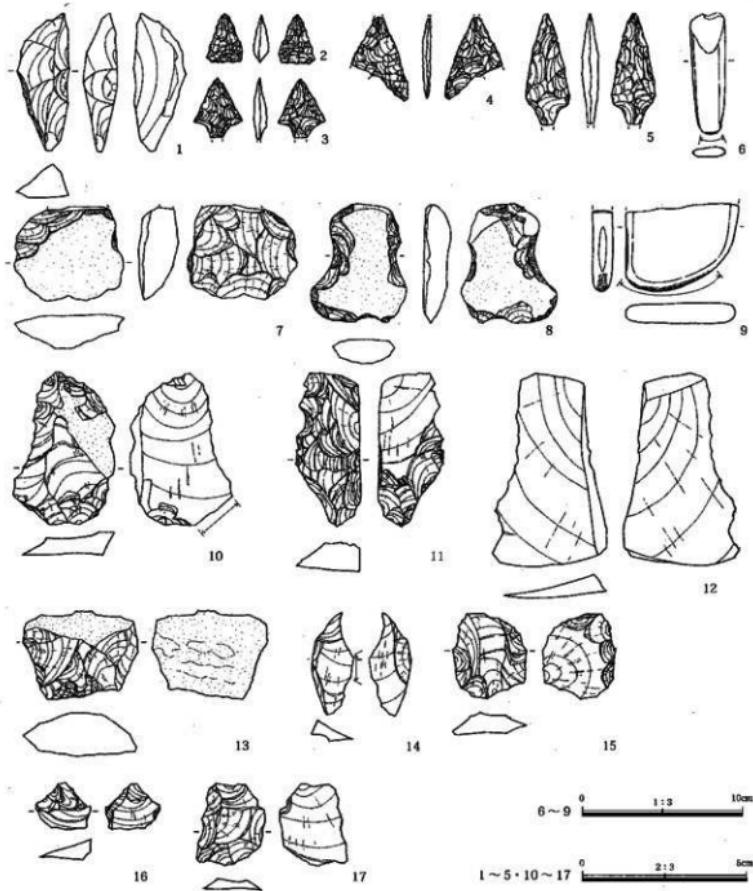
13は口縁部付近の破片、無文地に縦位のキザミを有する隆帯と深目の刺突を施す円形の貼付文がみられる。14は1段Lを横位施文の後に集合沈線による懸垂文がみられる。15・16は2段LRを横方向に施し、充填施文、15は朝顔形土器の腹部破片で、対弧文と考えられる。13・14・16はSI-04、15は遺跡調査地の北西出土。

7群 後期 加曾利B式土器（B2式か）（17）

口縁部が内傾する平口縁の土器。口縁の無文部は太い沈線により区画される。縄文原体は細めの2段LRを横方向に施している。SI-04出土。

(2) 石器（第11図、図版七・八）

本遺跡から出土した石器には、旧石器時代のものと縄文時代のものが確認できた。1は黒色安山岩の横長剥片を素材とするナイフ形石器と考えられる。右側縁は急角度の調整を施す。左側縁の基部調整については破損のため不明。全体に風化が著しく、剥離は不明。長さ6.8cm、幅1.6cm、厚さ1.1cm、重さ6.59g。試掘トレンチ5出土。2～5は石鏃。2は厚手のチャート製剥片を素材とする。平面三角形を呈する小形の石鏃。長さ1.5cm、幅1.2cm、厚さ0.5cm、重さ0.7g。表採。3はチャート製の小型有茎鏃。側縁は直線的、莖は下半部を欠損する。後期のものか。幅1.5cm、厚さ0.4cm、重さ0.77g。試掘トレンチ2出土。4はチャート製の薄手の剥片を素材とする。先端部と一方の脚部を欠損する。早期に多い。残存長さ2.6cm、厚さ0.3cm、重さ1.02g。C2区出土。5は黒色安山岩製で、柳葉形の身をもつ有茎鏃。莖の先端を欠損し、風化している。後期のものか。幅1.3cm、厚さ0.5cm、重さ2.12g。C2区出土。6は粘板岩製で、先端部に細かな敲打痕がみられる。使用痕ともみられる敲石とした。上端は欠損する。幅2.1cm、厚さ0.6cm、重さ18.3g。C4区出土。7は厚手の剥片を素材とした石核か礫器と考えられる。器面の摩滅風化が著しく不明。片面は自然面である。長さ5.8cm、幅7.1cm、厚さ2.2cm、重さ118.62g。C4区出土。8は安山岩製で、扁平な礫を素材にした小型の分銅形打製石斧。表面・背面ともに自然面を多く残す。長さ7.4cm、幅6.0cm、厚さ1.5cm、重さ82.24g。C3区出土。9は砂岩製の敲石と考えられる。上半部を欠損する。下端部から右側縁部に敲打痕がある。やや赤味を帯びて熱を受けた可能性がある。残存長さ5.5cm、幅7.0cm、厚さ1.3cm、重さ80.09g。SK-06出土。10・11は石核から取られたチャート製の剥片。打面を移した一端に微細な剥離痕を持つため、使用痕と考えられる。10は長さ4.7cm、幅3.0cm、厚さ1.3cm、重さ12.542g。C2区出土。11は長さ4.8cm、幅2.0cm、厚さ1.9cm、重さ10.69g。C5区出土。12はホルンフェルス製の縦長剥片。摩滅が著しく、使用痕などは不明。長さ6.0cm、幅3.6cm、厚さ0.7cm、重さ18.89g。西端トレンチ付近出土。13は高原山産の黒曜石と考えられる。上面・背面に自然面を残す。下端部にある急角度の剥離は使用痕と考えられる。撞器的な使い方をした可能性がある。長さ2.7cm、幅3.5cm、厚さ1.3cm、重さ12.96g。SD-03出土。14・16は信州産の黒曜石製の剥片または破碎片である。14は右側縁の一部に使用痕とみられる微細な剥離がみられる。14は長さ3.4cm、幅1.3cm、厚さ0.6cm、重さ1.69g。試掘トレンチ1出土。16は長さ1.4cm、幅1.6cm、厚さ0.7cm、重さ1.39g。C3区出土。15・17はチャート製の剥片を素材とする。15は剥片の縁辺に加工を施しているため、削器の可能性がある。長さ2.7cm、幅2.1cm、厚さ0.7cm、重さ4.56g。D4区出土。17は目立った使用痕が確認できなかった。長さ2.5cm、幅2.3cm、厚さ0.3cm、重さ1.81g。C3区出土。



第11図 石器実測図

第3節 古代・中世

本遺跡の調査で、奈良・平安時代の古代竪穴住居跡と中世の溝（堀）などが確認されたので、報告する。

(1) 竪穴住居跡

S I - 01 (第12・13図、第2表、図版三・八)

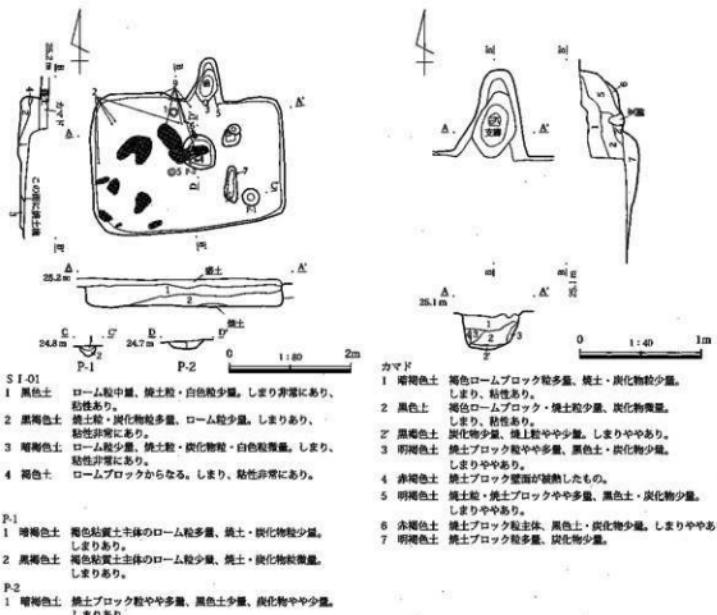
本住居跡は、調査した範囲の中央や北側に単独で存在する。規模は南北2.0～2.3m、東西3.1～3.2mであり、東辺に比べて西辺が長いことからやや台形気味になっている。遺構確認面から床面までの深さは、北側の壁で33cm、南側では4cm程度であって、地形が南に傾斜することに起因するであろう。

覆土は、図中2層が床面上に堆積する層であるが、焼土や炭化物を多く含んでおり、人為的に埋め戻された土と判断される。まとまって出土した焼土を平面図に示しておいた。

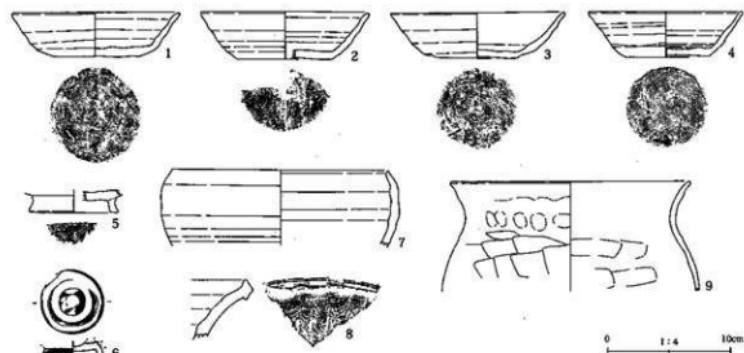
床面はほぼ平坦であって、周溝は確認されなかった。床面にピットが確認された。P-1は焼土や炭化物を含み、住居の覆土と類似した土であり、住居を廃棄した際には空いていた可能性も残る。住居跡北東部のピットのうち、北側の小穴は床下で確認されたものである。

住居床面の中央部には、径50～60cmの平面円形の焼土が確認された。焼土の深さは10cmあまりであり、炉と考えられる。この中から土師器の破片が出土し、カマドで出土したものと類似する。炉とカマドの間は約40cm程度であり、間隔が狭いことから當時併用していたのかを考える必要がある。

カマドは、北辺の中央やや東寄りにある。袖の部分は遺存しておらず、煙道のみが残っていた。確認面に



第12図 SI - 01 実測図



第13図 SI-01出土遺物実測図

第2表 SI-01出土遺物観察表

No.	器種	大きさ(cm・g)	技法等	胎土	焼成	色調	残存率	注記
1	須恵器 壺	口径：14.2 底径：7.8 器高：3.7	内：ロクロナダ。 外：体部ロクロナダ、底部回転糸切り。三 縦底。	やや重い。灰色粒 やや多量、黒色細 粒、褐色粗粒少 量。	不良	内外：10TR8/3 浅黄褐	完存	No. 36
2	須恵器 壺	口径：13.6 底径：7.8 器高：4.0	内：ロクロナダ。 外：体部ロクロナダ、底部回転糸切りのち 外周手縫でヘラケズリ。三縦底。	良好。白色細粒多 量、灰褐色粒や少 量、褐色細粒少 量。	良好	内外：2.5Y7/1 灰白	底部1/2 体部1/3	No. 1- 4・19- 20・39
3	須恵器 壺	口径：13.5 底径：7.5 器高：3.7	内：ロクロナダ。 外：体部ロクロナダ、底部回転糸切り。 三縦底。	やや重い。 灰色粒 やや多量、黒色細 粒少 量。	不良	内：5Y4/1灰 外：2.5Y7/2 灰 黄	完存	No. 50
4	須恵器 壺	口径：12.5 底径：7.0 器高：3.7	内：ロクロナダ。 外：体部ロクロナダ、底部回転糸切り。三 縦底。	良好。白色細粒少 量、灰褐色微量。	良好	内外：5B5/1青灰 白	口一部欠 き、ほぼ完 存	No. 5
5	須恵器 高台付壺	(7.0)	内：ロクロナダ。 外：底部回転糸切り、高台貼り付け。ロク ロナダ。三縦底。	良好。白色細粒や 多量、黒色細粒 微量。	良好	内外：5Y4/1灰	底部1/2	No. 26
6	三彩陶器 托	高台径：5.0	内外面ロクロナダ。底部外面回転ヘラケズ リか。窓道具痕あり。底部内面と外側は白 粉。高台面と体部は縫部。縫隙は体部か ら発生したとみられる。	良好。キメ細かい りか。窓道具痕あり。底部内面と外側は白 粉。	良好	内外：10TR8/2灰 白	底部完存、 高台一部欠	No. 41
7	須恵器 鉄鉢形	口径：(17.6)	内外：ロクロナダ。	やや重い。白色細 粒多量、黒色細粒 少 量。	良好	内：N6/ 灰 外：3.5Y4/2 灰 褐	口縁～体部 1/8	No. 13
8	須恵器 壺		内：ロクロナダ。 外：ロクロナダ、褐焼波文状。三縦底。	良好。白色細粒、 褐色粗粒少 量。	良好	内外：5Y7/1灰白	口縁一部部 試掘トレー ンジ内	
9	土器壺 壺	口径：(19.6)	内：ロクロナダ、洞開ナダ。 外：ロクロナダ、粘土接合底・押圧痕あり。洞開ヘラケズリ。	やや重い。白色細 粒、褐色粗粒や 多量、褐色細粒少 量。	やや 良好	内外：5YR8/6明 赤褐	口縁部2/3 瓶上位1/5	No. 2- 3・ 12・ 40・ 46・ 49・P2 の6・ 北西区

における煙道の規模は幅60cm、長さが70cmであり、平面舟首形を呈している。北壁ラインより壁外に約10cm出た所で、煙道東西軸の中央の位置に砂岩の割石で作った支脚があった。表面は焼けて赤褐色を呈している。支脚の位置から判断して要を並置するものではなくて、要1個を煮沸するカマド構造であったことが推測できる。煙道上層の1層はロームブロックを多く含む暗褐色土で煙道の天井を作っていた可能性がある。

遺物は、床面から完全な形の須恵器などが出た。完形であることから、還棄された可能性もある。須恵器は、底部回転糸切りの未調整のものと、外周をヘラケズリするものがある。須恵器は全て三縦底の製品である。7は小片であるが、鉄鉢形になる。6は三彩の托底部片である。白釉・綠釉・褐釉を施している。

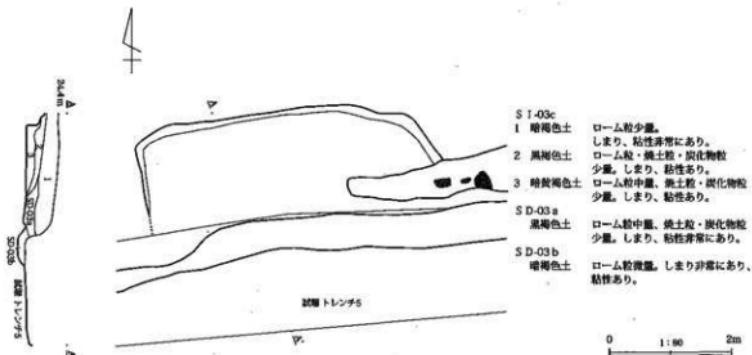
SI-03c (第14・15図、第3表、図版四・八)

本住居跡は、調査地中央やや南側に位置しており、溝と重複しているが、本住居跡の方が古い。遺構の周辺は比較的傾斜地で、住居跡北側と溝の南側では1m以上の比高差があり、住居南側は遺構確認面よりも上の高さに掘られていたと推測される。また、確認調査時の試掘トレンチによっても掘られており、遺存状況は良好ではない。

遺存する部分での住居跡の規模は東西4.9m、南北1.8mである。東西は概ね本来の規模を示すが、南北について本来の規模は明らかではない。平面的には、北西の角は端正に折れているが、北東の隅はなだらかで、不整形である。SD-03aによって東壁は壊されている。

覆土は、焼土や炭化物を含む黒褐色土や暗黄褐色土などである。ローム粒も一定程度含んでいることから、人為的に埋め戻された可能性がある。

壁は、北辺で約30cm遺存している。床は平坦であり、柱穴・周溝などは発見されなかった。カマドは東壁にあったとみられ、SD-03aの傾斜する壁の部分に焼土が発見された。その幅は、最大30cm程度、長さは東西に120cmに及び、比較的長い煙道であったことが推定される。溝で壊されているために、カマド燃焼部や煙道の焼けた部分のみ確認できた。



第14図 SI-03c 実測図



第15図 SI-03c出土遺物実測図

第3表 SI-03c出土遺物観察表

No.	器種	大きさ(cm・g)	技法等	胎土	焼成	色調	残存率	注記
1	土器底 小皿	底径:(5, 4)	内:ロクロナデ。 外:体部ロクロナデ、底部不明。	良好。灰白色・白色 繊維状・褐色粒や や多量。	不良 内外:TTR6/4 に近い様	黒褐色1/2	CSK	
2	土器盤 場		内:ロクロナデ、黒色處理・ミガキ。 外:ロクロナデ。	良好。白色調軟・ 褐色粒少量、黑色 繊維微量。	良好 内:N3/ 暗灰 外:10YR4/1褐色	体部下位一 部	CS区	
3	須恵器 盤		内:無文當て具底。 外:平行印き。	良好。白色粒多 量、灰色粒少量、 黑色繊維微量。	良好 内外:2.5Y6/1黄 灰	腹部一部	CS区	

図化できた遺物は少なく、覆土掘り下げ中に出土したものである。平安時代の土師器小皿や内面黒色処理を施した塊の破片や須恵器底の胸部片を図化した。

S I - 03d (第16・17図、第4表、図版四・九)

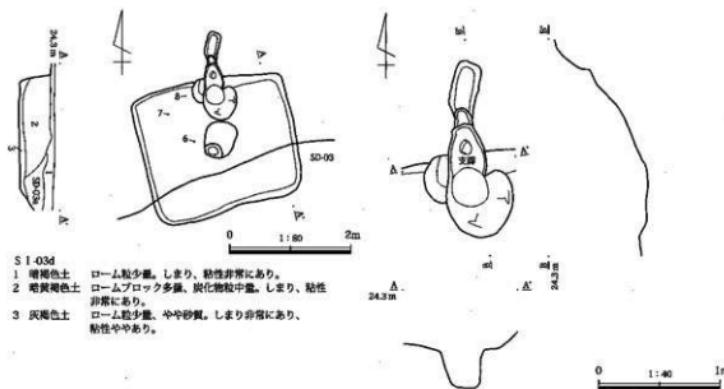
本住居跡は調査地中央東寄りにあり、溝SD-03aと重複し、本住居跡の方が古い。住居跡の規模は南北・東西の長さ2.6mで、ほぼ正方形をしている。S I - 03cの周辺地形と同じく、南側に向かって低くなる傾斜地で、住居跡の北側よりも南側は遺構確認面で70cm程低くなっている。このため、北側の方が壁の遺存状況も良くて、確認面から床面まで深さ60センチに達する。

覆土は、ロームブロックや炭化物を含んでいることから、住居を廃棄した後に人為的に埋め戻したものと推定される。

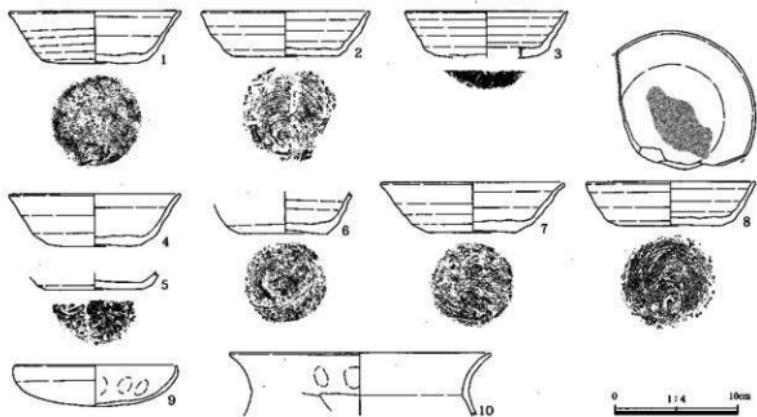
床面は4~5cmの高低差はあるが、概ね平坦である。柱穴などは発見されなかったが、住居中央には、長軸65cm、短軸50cm、床面からの深さ27cmで、平面橢円形を呈したピットが発見された。この中にはさらに6cmほど深い小ピットもあったが、その性格は明らかではない。

カマドは、北壁の中央に付設されている。袖は西側で少し残っていたが、東側では遺存していなかった。煙道は、北壁から75cm突出しており、幅約20cmと細長い作りである。煙道天井の構築材などは遺存しておらず、煙道底面の断面を提示した。底面は比較的急な角度で立ち上がり、先端部分約40cmは焼けていなかった。燃焼部は床面よりも15cmほど低くなっている。北壁のライン上に支脚が立てられていた。表面は赤褐色で焼けているが、土中にあった部分とみられる部位は焼けが少ないとから、上下を判断することができる。

図化した遺物は、10の土師器はカマドの煙道から出土した。8の須恵器环は床面から14cm浮いたレベルから出土。須恵器环が多く出土したために、図化することができた。これらは隣接する三毳窯産であるが、底部の調整技法に差異が認められる。糸切り後に外周を手持ちヘラケズリする1・3・4、回転糸切り未調



第16図 S I - 03d 実測図



第17図 S I - 03d 出土遺物実測図

第4表 S I - 03d 出土遺物観察表

No.	器種	大きさ (cm)	技法等	胎土	焼成	色調	残存率	注記
1	須恵器 壺	口径 : 14.0 底径 : 7.6 器高 : 4.3	内: ロクロナデ。 外: 体部ロクロナデ、底部回転糸切りのち 外周手持ちヘラケズリ。三醜底。	良好。灰色多量、白色細粒や 多量、黒色細粒や や少量。	不良 内外 : 2.5Y7/3灰 黄	口縁部3/4		
2	須恵器 壺	口径 : (13.6) 底径 : 8.8 器高 : 3.8	内: ロクロナデ。 外: 体部ロクロナデ、底部回転糸切り。三 醜底。	良好。灰色、白色 細粒やや多量、黑 色細粒少量、褐色 細粒微量。	良好 内外 : 10Y6/1灰	底部4/5、体 部一部	フク士	
3	須恵器 壺	口径 : (13.4)	内: ロクロナデ。 外: 体部ロクロナデ、底部外周手持ちヘ ラケズリ。三醜底。	良好。黒色細粒・ 白色細粒微量。	良好 内外 : 2.5Y6/2灰 黄	体部1/4 底部1/5	一括	
4	須恵器 壺	口径 : (13.8) 底径 : 7.8 器高 : 4.3	内: ロクロナデ。 外: 体部ロクロナデ、底部回転糸切りのち 外周手持ちヘラケズリ。三醜底。	やや粗い。灰色細 粒多量、黒色細 粒や多量、白色細 粒少量。	不良 内外 : 5Y7/1灰白	体部1/3 底部完存	フク士	
5	須恵器 壺	底径 : (8.0)	内: ロクロナデ。 外: 体部ロクロナデ、底部回転糸切り。三 醜底。	良好。白色粒や 多量、黒色細粒・ 白色細粒微量。	やや 良好 内外 : 2.5Y7/2灰 黄	底部1/2	一括	
6	須恵器 壺	底径 : 7.1	内: ロクロナデ。 外: 体部ロクロナデ、底部回転糸切り。三 醜底。	良好。白色細粒多 量、黑色細粒や 多量、黑色細粒・ 白色細粒微量。	良好 内外 : 5Y7/2灰白	体部下半 底部完存	No. 18	
7	須恵器 壺	口径 : (14.2) 底径 : 7.2 器高 : 4.1	内: ロクロナデ。 外: 体部ロクロナデ、底部回転糸切り。三 醜底。	良好。黒色細粒・ 灰色粒やや多量、 白色粒・ 灰色細粒微量。	やや 不良 内外 : 10Y6/3C 灰	口縁部1/6 底部完存	No. 16	
8	須恵器 壺	口径 : (13.8) 底径 : 8.4 器高 : 3.6	内: ロクロナデ。 外: 体部ロクロナデ、底部回転糸切り。三 醜底。	良好。赤褐色細 粒、黒色粒・白 色細粒や多量、 黑色細粒・ 白色粒少量、 白色細粒・ 灰色粒・ 灰色細粒微 量。	やや 良好 内外 : 5Y4/4暗オ リーブ	体部1/2 底部ほぼ完 存	No. 17	
9	土師器 壺	口径 : 13.2 器高 : 3.4	内: 横ナデ、押圧痕あり。 外: 口縁部横ナデ、底部技法不明。	やや良好。黒色細 粒、褐色粒多量、 透明細粒、白色細 粒少量。	やや 良好 内外 : 7.5Y5/4 灰	口縁部4/5	フク士	
10	土師器 壺	口径 : (21.2)	内: 口縁部横ナデ、胴部ナデ。 外: 口縁部横ナデ、押圧痕あり。胴部ヘラ ケズリ。	やや粗い。白色細 粒・ 黑色細粒や少 量、灰色粒・ 褐色粒少 量。	やや 不良 内外 : 5Y5/6明 赤褐	口縁部1/3	カマド 燃道	

整の2・5～8に分類することができる。技法的には後者の方が新しいことになるが、2・8などは器高が低くて、4は器高が高くて新出的な要素があるが、底部調整は外周へラケズリとなっている。

本住居跡出土品で特筆すべきは、8の底部内面に朱墨とみられる部分がある。また、9は群馬県域や埼玉県北部などに多い器形・技法の土器で、胎土に黒色細粒が多い点もその特徴を示している。

S I - 04 (第18～20図、第5表、図版四・五・九・十)

本住居跡は、調査地の北東隅にあり、拡張して全体を調査した。他の遺構との重複はないが、試掘トレンチによる深掘で、南壁は明瞭ではない。住居はグリッド北よりも東に振れており、北西—南東で3.8mになり、この方向にやや長い平面形になると推定される。土層図A-A'で示したように、遺構確認面から床面までの深さは35cmほどであって、掘り込みは深い。

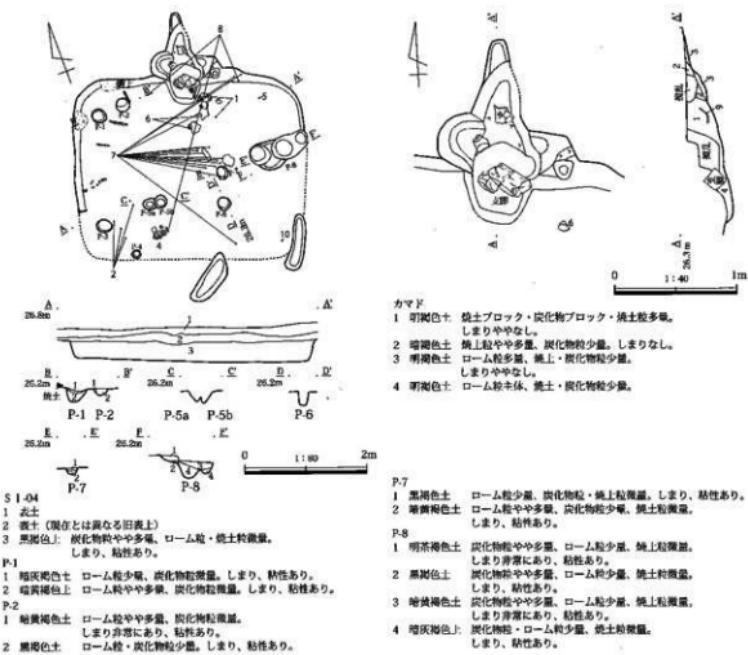
住居の覆土は、炭化物を多く含む黒褐色土であり、焼土も含んでいる。平面図の中にも焼土がまとまって確認された部分を示した。棒状の炭化物が発見され、北壁のカマド前と住居北西隅の東側では北辺に対してやや斜めに炭化物がのびている。北西隅では住居隅に向かって炭化物がのび、西壁側では3箇所で壁に対して直交する方向にのびている。このため、これらは屋根の垂木であると考えられ、覆土の様子や炭化物の出土状況から、本住居は焼失家屋の可能性がある。

床面はほぼ平坦であり、多数の小型のピットが発見されたが、対になっているものや柱痕の確認できたものはない。多くのピットで焼土や炭化物が確認され、住居跡の覆土と類似した土層となっており、焼失した時に空いていた可能性がある。

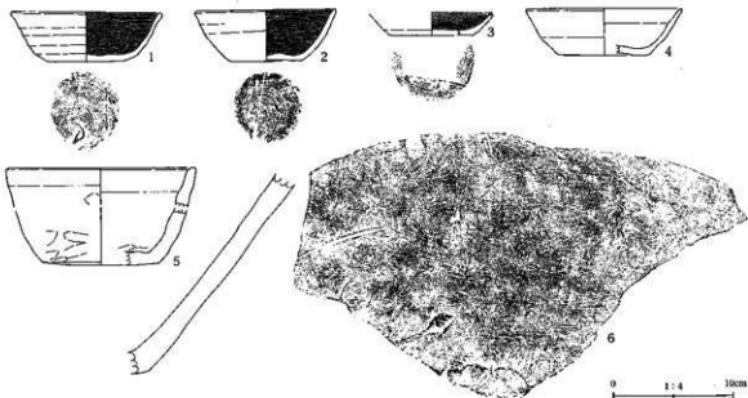
カマドは、北壁のほぼ中央に付設されていた。袖は遺存しておらず、燃焼部から煙道が残っていた。平面的には、北壁ラインの左右に突出しているようになっているが、この部分は掘堀によるものであって、北壁を掘り込んだ横幅はさらには狭いものであったと推定される。カマド東脇にある径30cmほどのピットは深さが住居の床面よりも4cmほど浅いが、このカマドに関連するピットの可能性もある。住居の北壁ラインに近い位置で、長方形の割石が斜めになっていた状態で出土した。表面が赤褐色に焼けていたことから、支脚と判断される。カマドの横軸での支脚の位置を見みると、長軸の主軸上にすることから、支脚は1個で、このカマドは棗1個掛けの構造であったことが推定される。燃焼部は床面を少し掘っており、ここにローム主体で、焼土・炭化物を含む土が確認された。浅い焚口ピットとみられる。煙道は平面やや細長い舟首形で、図中の1層の中から遺物が多く出土した。この層は焼土や炭化物を多く含む層であり、煙道の天井とはみられない。

遺物の出土状況では、1・2の土師器杯・10の砥石は床面近いレベルから、7の須恵器甕は床面の破片と覆土中から出た破片が接合した。5の捏鉢や6の甕は覆土中から出土した破片であり、家が焼けた後に投棄・流入したものと推定される。3・4はカマド内から出たものであるが、二次的に入った可能性もある。

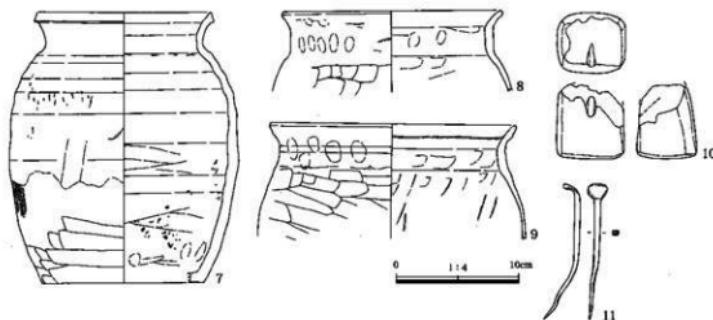
遺物についてみてみると、5の捏鉢は三義産とみられるが、器高に比べて口径が大きい点が特徴である。7の須恵器甕は器形的に珍しいもので、腹部を平行叩き整形した後に上半分をクロナデして、下半をヘラケズリする。器高が一般的な甕に比べて低く、頸部の短いことが特徴で、内面に褐色の付着物が観察された。漆塗器容器の可能性ある。10の提鉢は上方を少し欠くが、紐通しの孔が斜めになっている。また、稀有な資料に11の銅製の釘がある。長さは本来3寸とみられ、頭を少し折り曲げて、足は下半が曲がっていることから使用後のものと判断することができる。住居跡の覆土上面から出土したことから廃棄品とみられる。



第18図 S I - 04 実測図



第19図 S I - 04 出土遺物実測図 (1)



第20図 S I - 04 出土遺物実測図 (2)

第5表 S I - 04 出土遺物観察表

No.	器種	大きさ(cm・g)	技法等	胎土	焼成	色調	残存率	注記
1	土師器 壺	口径: 12.4 底径: 6.4 器高: 4.1	内: ロクロナダのち黒色処理・ミガキ。 外: 体部ロクロナダ、底部回転未切り。	良好。赤褐色粒多量、白色粒・黑色粒少量。	良好 内: 5TR2/1黒褐色 外: 5TR6/8褐色	口縁部一部 欠き、ほぼ 完存	No. 53 ・54・ 床面	
2	土師器 壺	口径: 11.8 底径: 6.0 器高: 4.2	内: ロクロナダのち黒色処理・ミガキ。 外: 体部ロクロナダ、底部回転未切り。	良好。黒色細粒多量、白色細粒微量。	良好 内: 7.5TR1.7/1 黒褐色 外: 7.5TR5/8明 褐色・7.7TR3/1黒 褐色	口縁部一部 欠き、ほぼ 完存	No. 2・ 3・4・ 5	
3	土師器 壺	底径: 6.8	内: ロクロナダのち黒色処理・ミガキ。 外: 体部ロクロナダ、底部回転未切り。	良好。白色細粒多量、黒色細粒・灰 色細粒や多量、 褐色粒微量。	良好 内: 2.5TR3/1黒 褐色 外: 7.5TR5/4橙 褐色	底部1/2	カマド 一活	
4	須恵器 壺	口径: (12.6) 底径: (7.9) 器高: 3.8	内: ロクロナダ。 外: 体部ロクロナダ、底部回転未切り。三 瓣底。	良好。灰色粒や多量、白色細粒少 量、黒色細粒微量。	不良 内外: 2.5TR7/4 浅黃	口縁部1/6 底部1/6	カマド No. 6	
5	須恵器 鉢	口径: (15.4) 底径: (9.6) 器高: (8.0)	内: ロクロナダ・ナダ。 外: 体部ロクロナダ・ナダ、底部ナダ。	良好。白色細粒・ 灰色細粒多量、黑 色細粒・白色粒少 量。	良好 内: 7.5TR6/4 にぶい煙	底部下半 底部1/3	No. 61 ・D-1 区・D- 1区サ ブトレ ンシ内	
6	須恵器 甕		内: 脚部ナダ。 外: 脚部上半ナダ、下半ケズリ、布目压痕 あり。	良好。白色細粒や多量、灰色粒少 量、黒色細粒微量。	良好 内: 7.5TR5/4にぶ い煙 外: 5TR6/2灰 色	脚部下位一 部	No. 48 ・49	
7	須恵器 甕	口径: (14.2) 底径: (13.2) 器高: 22.3	内: 口縁部一側斜上半ロクロナダ、粘土接合處 あり。中下位ナダ、下端に押正底。褐色の付着物あり、疊か。 外: 口縁部一側斜上半ロクロナダ、粘土シ フあり。中位延方向ナダ、下半平行叩き、 下位ヘラケズリ。	良好。白色粒や多量、灰色粒少 量、白色粗粒・黑 色細粒微量。	良好 内: N6/灰 外: 2.5TR6/1黄灰	口縁部1/2 脚部1/2 底部1/4	No. 21 ・25・ 28・ 30・ 31・ 39・ 41・ 42・ 44・ 50・ 55・ 58・ 67・D- 1区	
8	土師器 甕	口径: (17.8)	内: 口縁部横ナダ、脚部ナダ、粘土接合處 あり。 外: 口縁部横ナダ、粘土接合處・押正底 あり。脚部ヘラケズリ。	良好。白色細粒・ 白色粒や多量、 褐色粒少量、黑色 細粒微量。	良好 内: 7.5TR6/6褐色 外: 5TR6/6明赤 褐色	口縁部1/2	カマ ド・ No. 6・ 32・56	

No.	器種 類	大きさ(cm·g)	技法等	胎土	焼成	色調	残存率	注記
9	土師器 甕	口径：(20.0)	内：口縁部横ナギ、ナダ、肩部ヘフナギ。 外：口縁部横ナギ、粘土接合痕・押圧痕あり。 底部ヘラケツリ。	良好。黒色鉢粒や や少量、白色粒少 量。	内：5TBS/6明赤 外：10TBG/4灰 青	口縫部1/4 胴上位1/5	カマド No.1	
10	砾石	長さ：(4.3) 幅：3.9 重さ：(91.8)	孔が付く小型の撿破。図上面は左端が残る 他は欠損する。孔は底面に対して斜めに穿 たれている。底面は図の下面と鏡面4面。 仕上げ跡か。		石：5TB/1灰白 表面：10TBG/1灰 青	撿破中下位	No.20	
11	編製品 針	長さ：8.4 幅：0.3 重さ：5.41	頭部は薄くて、くの字形に折り曲げてい る。尾側が曲がっている。				完存	フク上 面南 東側一 括

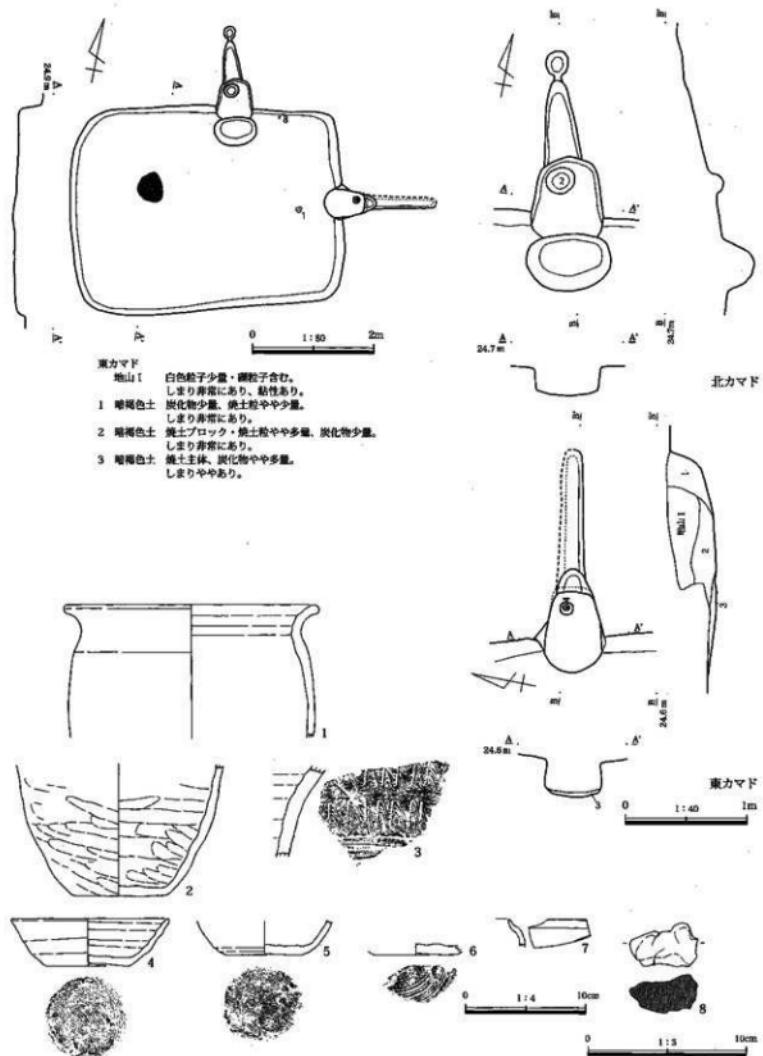
S I - 12 (第21図、第6表、図版五・六・九・十)

本住居跡は、調査地中央やや東寄りに位置し、他の遺構との重複はない。住居の主軸はグリッド北よりも西に振れており、南北よりも東西が長い長方形を呈している。竪穴の規模は、東西4.5m、南北3.4mである。南西・西北隅の掘り方が平面的に弧状になっており、北東・南東隅が端正に折れているのと対照的である。周囲の地形が北側から南側への緩傾斜であることから、北壁の方が深く残されており、確認面から床面まで約40cmあるが、南壁では16cmほどの所もある。床面は概ね平坦であるが、8cmほどの高低差がみられる。住居中央よりも西寄りにおいて、50cm×40cmほどの範囲が焼けており、炉であると考えられる。炉は住居の中央部にあることが多いが、本住居の場合には東西に長いことから西側のスペースも土間として用いられていたことがわかる。

カマドは北側と東側に付設されていたが、袖の有無による新旧関係などは把握できなかった。北カマドは北壁中央よりも東側にある。焚口には実行き45cm、床面からの深さ26cm、平面橢円形のピットを掘っていた。このピットの上層は暗褐色土、下層は炭化物を主体にして、焼土をやや少量含んだ土であった。ここはあまり焼けておらず、北壁寄りから後述の支脚までの底面が焼けていたことから、この部分が燃焼部であると想定できる。北壁ラインよりも20cmほど外側に出た位置に土師器甕の頸部下半部を伏せていた。底面を10cmほど掘り窓めて甕を置き、底部の平坦面を支脚としていたとみられ、支脚はカマド底面から6cmほどの高さであった。カマドの横軸からみた支脚の位置は、煙道主軸よりも西側に寄っており、小甕をこの支脚に乗せて台とし、東側により大きな甕を掛けた二連式と考えられる。煙道は、支脚のある位置から急に幅を狭めており、細くてやや長くのびる点を特徴とする。底面は比較的緩傾斜であり、側面が良く焼けていた。

東カマドは、東壁中央に設けられている。袖などは確認できなかったが、後述のように支脚の位置が壁よりも大きく外に出ていることから袖が無く、地山の両サイドを袖の機能としていた可能性も残る。しかし、底面は東壁よりも住居内側に30cmほど入った位置まで焼けていた。東壁ラインから外側に15cm出た位置に完形の須恵器甕が伏せて置いてあり、支脚とみられる。横方向における支脚の位置は、燃焼部空間の中心よりも北に寄っており、北カマドと同じく棗掛け二連式と考えられる。煙道は細長く外にのびており、煙道天井が地山であることも大きな特徴となっている。天井内面と側面がよく焼けていた。煙道の幅は概ね20cmで、北壁から遺構確認面の先端まで155cmであった。このように削抜式で長大な煙道は、県内でも少なくて偏在している。煙道底面は傾斜がほとんどなく、先端に至って急角度で立ち上がる。

遺物の出土状況では、1は東カマド前の床面から、2は北カマドの支脚、4は東カマドの支脚、8は含鉄鍛治済は北カマドの東脇床面から出土した。図化した他の土器は覆土中から出たものである。遺物では、須恵器甕は隣接する三毳窯の製品であった。3の須恵器甕の頸部には横位の弦線が施されており、环などから推定されるこの竪穴住居の時期には、大甕の頸部に横位沈線は施されなくなっていることから、伝世したもの



第21図 S1-12実測図・出土遺物実測図

第6表 S I - 12 出土遺物観察表

No.	器種	大きさ (cm・g)	特徴等	粘土	焼成	色調	残存率	注記
1	土師器 甕	口径 : (20.6)	内: 口縁部横ナデ、底部不明。 外: 口縁部横ナデ。底部ナデか。	良好。白色細粒や や多量、黑色細 粒・褐色粒少量。	やや 不良	内外: 7.5TR6/6 梗	口縁部 L/8 肩上位 1/6	No. 1
2	土師器 壺	底径 : 8.2	内: 脚部・底部ナデ。 外: 脚部・底部ナデ。	良好。黑色細粒、 白色細粒多量、灰 色粒やや少量、褐 色粒微量。	良好	内: 5TR6/6梗 外: 7.5TR6/4 にぶい梗	脚部下位 3/4 底部完全	北カイ ド No. 2
3	須恵器 甕		内: 脚部ロクロナデ。 外: 脚部ロクロナデ。平行叩き後にロクロ ナデ、輪縞状文、沈線施す。	良好。白色細粒多 量、黑色細粒少 量。	良好	内外: 2.5Y6/1青 灰	頭部一部	南東
4	須恵器 环	口径 : 12.9 底径 : 7.0 高さ : 4.0	内: ロクロナデ。 外: 体部ロクロナデ、底部回転糸切り。三 輪底。	粗い、沙質、黑色 細粒多量、白色 細粒少量。	やや 良	内外: 10YR7/6明 黄褐	完全	東カイ ド No. 1
5	須恵器 环	底径 : 6.4	内: ロクロナデ。 外: 体部ロクロナデ、底部回転糸切り。三 輪底。	良好。灰色細粒多 量、白色細粒、黑 色細粒、白色粒や や多量、白色粒、 灰色粒少量、白色 粗粒微量。	良好	内外: 7.5TR5/8 明褐	体部一部 底部完全	北東
6	須恵器 环	底径 : (7.0)	内: ロクロナデ。 外: 体部ロクロナデ、底部回転糸切り。三 輪底。	良好。白色細粒多 量、灰色粒、褐 色粒少量。	良好	内外: 10YR7/3に ぶい黄褐	底部 2/5	南西
7	須恵器 鉢		内: 口縁部ロクロナデ。 外: 口縁部ロクロナデ。	良好。白色細粒や や多量。	良好	内外: N/ 灰	口縁部一部	南西
8	合鉢治 漆	長さ : 4.3 幅 : 2.7 重さ : 24.71	表面に土砂が付くが、放射割れと磁着があ り、漆の中に擦痕があるとみられる。			外: 7.7TR3/1黒 褐	完全か	No. 2

のと考えられる。また、鍛冶津が 1 点のみであるが、確認できたことから、零細な鍛冶業が行われていたことが判明した。

(2) 溝跡・堀跡

S D - 03a (第 22 図、第 7 表、図版六・十)

調査地南北中央よりもやや南側を東西にのびる溝である。S D - 03b と重複しており、土層図 B - B' - C - C' によって、S D - 03a の方が新しいと判明した。溝は平面的には蛇行しながらび、確認面での最大幅は 1.1m である。底面のレベルでは S I - 03d 付近は、調査区の東端よりも 14cm ほど高くなっている。台地下に向かつて低くなっている。遺構確認面では S I - 03d よりも西に 3m ほどで溝の掘り込みがなくなるが、土層図 B - B' でも S D - 03a の覆土に相当する 2b ~ 2d 層があり、底面に凹凸を持って調査区の西端よりさらに西にのびていたと判断される。

覆土は、ロームブロックを比較的多く含んだ黒褐色土や黄褐色土であって、人為的に埋め戻されたものと推定される。

遺物は、古代の遺物と中世のものが入っており、両者を区別した。1 の内耳土器は、S D - 03d の西側で溝の底面近くから出土した。2 は土師器の塊である。1 は、S I - 03d の南側の位置で、溝の底面よりも 10 cm ほど浮いた高さから出土した。周囲の地割と溝の位置が一致することから、地境の溝であると考えることができる。中世の遺物が溝の底面付近から出土したことにより、遺跡周辺の地割が中世まで遡ることが明らかになった。

S D - 03b (第 22 図、第 7 表、図版六)

S D - 03a と並んで東西にのびる溝である。土層観察によって S D - 03a と重複しており、S D - 03b の方が古いと判明した。平面的には調査地内では弧状にのびており、細かく見ると底面や側壁は蛇行している。

第3章 発見された遺構と遺物

底面のレベルでは、調査地の東端から S I - 03d 付近まで高さがほぼ同じで水平であるが、作業用通路とした残したベルト部分の西側で調査地西端では 15cmほど低くなっている。台地の傾斜に合わせて、溝底面も低くなっているといったものとみられる。

覆土は 3b 層が黄褐色土であり、埋め土の可能性もあるが、3a 層はローム粒を微量含む程度であって自然堆積したこととも考えられる。

遺物では、S I - 03d 南側で、溝底から 10cm 浮いた高さで、3 の瓦質土器の鉢が出土した。この鉢は、口縁部に平坦面があり、体部が直線状に立ち上がる形態である。4 の土師器壺は窓穴住居の時期の所産で、流入品とみられる。

遺物で、D 5 区・C 5 区から出土したかわらけや炉壁は S I - 03c か溝のものか判別はできなかった。かわらけは、底部糸切りで内面から体部外面までロクロナデするものであり、やや大型のものであろうか。

S D - 07a (第 23 図、第 8 表、図版六・十)

本遺構は、調査地の東端にあり、西側にはなだらかに東側に傾斜する S D - 07b が所在する。当初、この遺構は幅の狭い溝と考えていたが、掘り下げる結果、なだらかな遺構となった。土層観察の結果、本溝は S D - 07b と重複しており、S D - 07b よりも新しいと判断した。本遺構は、この付近に所在すると言われていた黒持藤岡城跡に関連する堀とみられる。以下、堀と呼ぶ。

遺構確認面で堀の規模は、堀の両側の立ち上がりが確認できた D 4 グリッドで幅 1.5m ほどであったが、D 3 グリッドにある堀は、堀底から立ち上がった上端までの間隔があり、堀幅も広くなる可能性がある。堀底は、平坦面があり、底のレベルをみると、S K - 07c 付近を境に、その北側では比較的平坦であるが、ここから南側では急激に低くなり、堀が南北から東に折れる所では、S K - 07c 付近の底面よりも 40cmほど低くなっている。これは、堀のある周囲の地形が、北側から南側に向かって低くなる緩斜面であることも関係するであろう。堀の側面は D 3 グリッドでは傾斜が緩やかであるが、そのほかの部分ではほぼ傾斜が同じである。

覆土は、褐色土・黒褐色土・黄褐色土であり、ローム粒を一定程度含んでいた。このため、堀は人為的に埋まつた可能性もあるが、城の場合には堀の内側に土塁を築く場合があり、土層図中の 3 層は土塁の崩落土の可能性も残っている。

出土した遺物は、2 は堀底から 70cmほど浮いたレベルから出土したかわらけ片である。このかわらけはロクロナデしたものである。

S D - 07b (第 23 図)

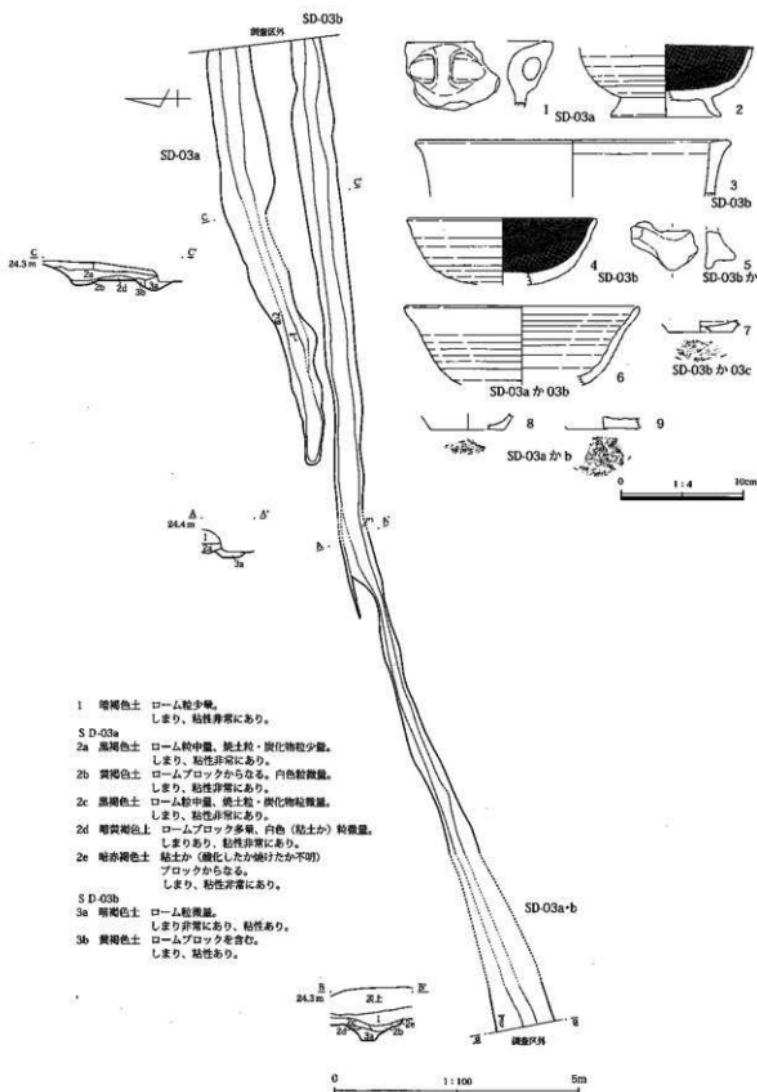
D 3・D 4 グリッドにおいて、S D - 07a の西側において北から南に向かって幅が広くなる落ち込みが確認された。深さは 20 ~ 30cm ほどであるが、落ち込みの西側の上端近くのところで窪み、その東側では傾斜が少なくて、平坦に近い底面である。

覆土は、ロームを少量含む暗褐色土であるが、土層や落ち込みの性格などは明らかではない。

(3) 土坑

S K - 02 (第 24 図)

調査地の中央やや北東に位置する。南北 3.3m、東西 1.1m で、南北に長い長方形土坑である。確認面からの深さは 30cm ほどであって、南に向かって 15cmほど底面が低くなっている。図中 5 層は底面に接する最下



第22図 SD-03a・b 実測図・出土遺物実測図

第7表 SD-03a・b 出土遺物観察表

No.	器種	大きさ(cm)	技術等	胎土	焼成	色調	残存率	注記
1	内耳土器		内：口縁部横ナデ、耳貼り付け。 外：口縁部ヨコナゲ。	やや粗い。白色粒多量、透明粒少量。	良好	内外：Nz/ 黒	口縫一部 SD-03 No. 2	
2	土師器 高台付壇	高台径：8.8	内：ロクロナデのち黒色處理・ミガキ。 外：体部ロクロナデのち下端回転・ヘラケズリ、底部高台貼り付け・ロクロナデ。	やや良好。黒色粒や多量、白色粒や少量。	良好	内：10YR2/1黒褐色 外：10YR7/3にぶい黄褐色	体部一部 高台3/5 SD-03 No. 4	
3	瓦質土器 瓶	口径：(25.4)	内：ロクロナデ。	良好。白色細粒、黑色細粒少量。	良好	内外：10Y7/1灰白	SD-03 No. 11	SD-03 L/8
4	土師器 壇	口径：(15.2)	内：ロクロナデのち黒色處理・ミガキ。 外：体部ロクロナデのち下端回転・ヘラケズリ。	やや粗い。白色細粒、黒色細粒や多量、白色粒、透明粒、褐色粒少量。	良好	内：10YR4/1褐色 外：10YR7/3にぶい黄褐色	口縫部・体 部5/5 SD-03 No. 8	SD-03 C5区
5	炉壁	長さ：(5.4)	黒色ガラス化した炉壁で、羽口付近のものか。	良好。黒色細粒、灰色細粒少量。		外：10YR2/1黒	壁一部 SD-03 C5区	
6	土師器 壇	口径：(19.0)	内：体部ロクロナデ。 外：体部ロクロナデのち下端回転・ヘラケズリ。	やや粗い。白色細粒多量、褐色粒少量、白色粒微量。	不良	内外：10YR5/3にぶい黄褐色	口縫部1/4 体部1/5 SD-03 No. 14	SD-03 C5区
7	かわらけ	底径：(5.2)	内：体部ロクロナデ。 外：体部ロクロナデ、底部糸切り。	良好。黒色、白色、褐色細粒少量。	やや不良	内外：7.5T7/6橙	底部1/4 SD-03 D5区	
8	かわらけ	底径：(6.0)	内：体部ロクロナデ。 外：体部ロクロナデ、底部糸切り。	良好。灰色、白色粒や少量、黑色、褐色細粒少量。	良好	内外：10YR7/4にぶい黄褐色	底部1/4 SD-03 C5区	
9	かわらけ	底径：(6.0)	内：体部ロクロナデ。 外：体部ロクロナデ、底部回転糸切り。	良好。黑色粒や少量、褐色粒少量、白色粒微量。	やや不良	内外：10YR7/4にぶい黄褐色	底部1/4 SD-03 C5区	

層の土であるが、ここにローム粒が一定程度含まれていることから埋め戻されたものと推定される。

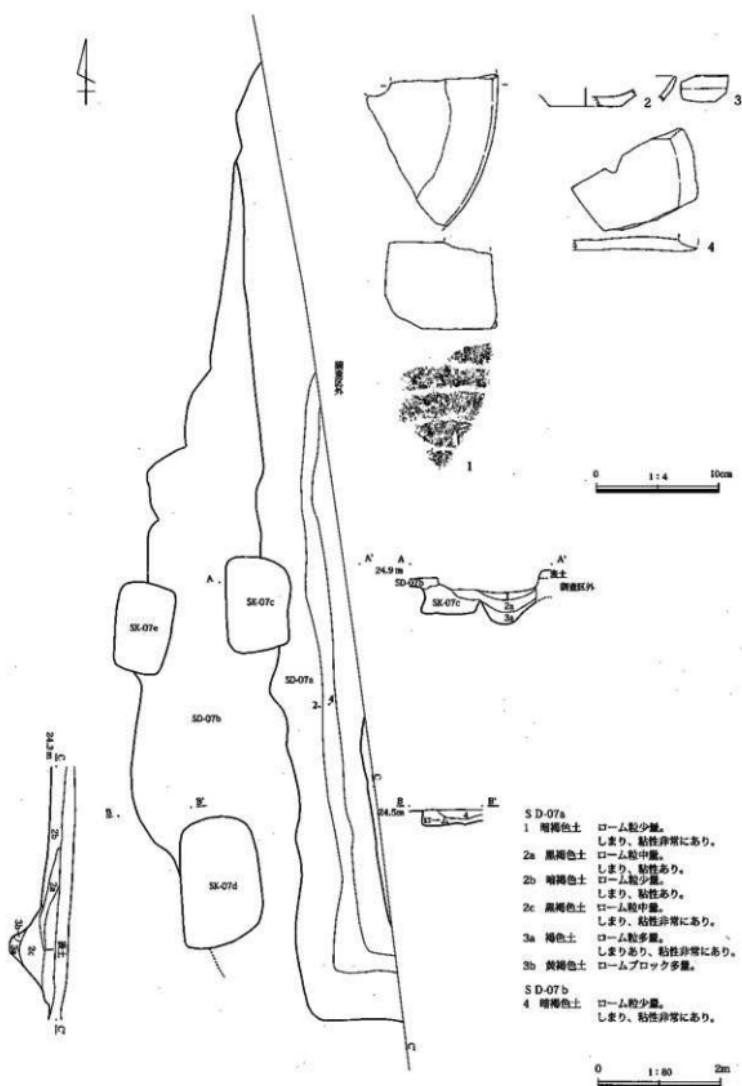
SK-05 (第24図、第9表)

調査地の北端にあって、比較的高い位置に所在する。北東—南西2m、北西—南東1.75mの平面橢円形の土坑である。試掘トレーンチ2で比較的深く掘ったが、壁は10~14cmほど残っていた。土坑底面は平坦になっており、周囲の壁は下端であるがやや緩やかに立ち上がっている。覆土は炭化物や焼土を含む黒褐色土などであり、埋め戻されたものと判断することができる。特に、土坑の北側部分では焼土や炭化物がまとまって確認された。遺物は須恵器の高台付环2点を図化した。土坑底面から9~13cm浮いたレベルで出土し、土坑を埋め戻す際に共に廃棄した破片と推定される。

須恵器高台付环は共に底部を回転糸切り離して、高台を貼り付けている。高台は長くのびて踏ん張る形態で共通する。

SK-06 (第24図)

調査地の北西端に存在する。トレーンチ2の西端で確認され、北側に拡張して全体を調査した。4~5基の土坑が重複している可能性があるが、まとめて発番した。南側の掘り込みが最も大きくて、北東—南西で約1mの規模になる。この大きな土坑の底面はやや凹凸があるが、確認面から7cmほどの深さ、その北側の小ピットは大きな土坑の底面から23~28cmほど深くなっているが、新旧関係やそれらの全体形は不明瞭である。南端の大きな土坑の覆土は、ロームブロック・ローム粒子や炭化物が含まれていた。このため、人為的に埋め戻されたと推定される。



第23図 S D - 07a・b 実測図・出土遺物実測図

第8表 SD-07a・b 出土遺物観察表

No.	器種	大きさ(cm・g)	技法等	胎土	焼成	色調	残存率	注記
1	石臼	高さ: 7.1	上面周縁の突起部を欠く。下面に構を影る。			内外: SY5/1灰	側縁部一部	
2	かわらけ 底径: (6.0)		内: 体部ロクロナデ。 外: 体部ロクロナデ、底部不明。	良好、透明、白色粒・褐色微少量。	良好	内: SY7/2灰白 外: 7.SYR7/3C ぶい・橙	底部1/6	SD-07 No. 2
3	かわらけ		内: 体部ロクロナデ。 外: 体部ロクロナデ。	良好、透明細粒少量。	良好	10SY7/4C ぶい・黄橙	口縁部一部	SD-07 D-3区
4	須恵器 盤		内: 底部技法不明。 外: 底部技法不明。新治窯産。	やや粗い金色調粒多量、褐色粒・白色粒・透明粒やや少量。	不良	内外: SY7/2灰白	底部一部	SD-07 No. 1

SK-07c (第24図)

調査地の東端にあり、SD-07aよりも古い。この溝は戦国期の城の堀と判断されたことから、この土坑は城よりも古く、中世以前の土坑と判断される。土坑の規模は南北1.5m、東西0.95mで、平面長方形である。遺構確認面からの深さは約50cmで、底面は平坦であった。覆土は大半がロームを多く含む黒褐色土であったが、壁際はロームブロックからなり、埋め戻されたものと判断できる。

SK-07d (第24図)

調査地の東端にあり、浅くなだらかな溝SD-07bと重なるが、溝の覆土の残りが少なくて、新旧関係は不明である。土坑の規模は南北2.1m、東西1.3mであり、南北に長い。平面的には南辺が東西辺に対して斜めになっており、台形に近い形になっている。

SK-07e (第24図)

SK-07cの西側にある。SD-07bと重なるが、溝の覆土の残りが少なくて、新旧関係は不明である。規模は南北1.5m、東西0.9mで、南北に長い長方形土坑である。土坑底面の平面形は長方形であるが、遺構確認面ではやや不整形になっている。遺構確認面から底面までの深さは26cmと比較的深い掘り込みであった。戦国期以前の土坑SK-07cと方向や形態が類似していることから、近い時期の所産の可能性も残る。

SK-08 (第24図)

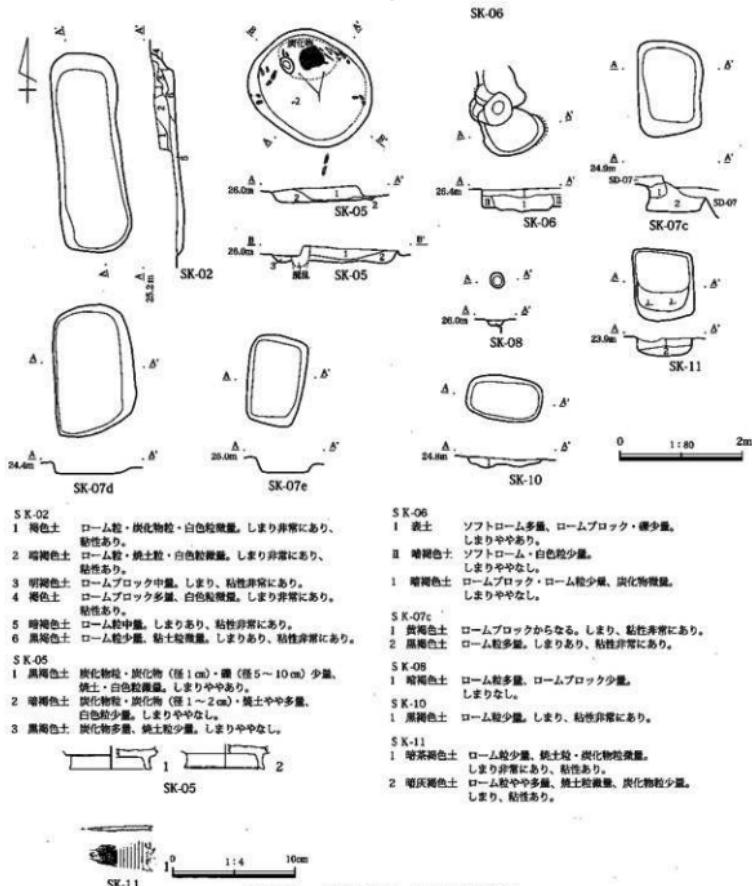
調査区北端にある小ピットである。径25cmほどで平面円形を呈している。確認面からの深さは10cmで、多量のローム粒子や少量のロームブロックを含んでいることから人為的に埋め戻されたものと判断することができる。断面は楕円形を呈している。

SK-10 (第24図)

SK-07eの北西に所在する。東西1.23m、南北0.75mの規模で、東西に長い長方形土坑である。平面的には南北の長辺がやや胴張り気味になり、四隅も丸味を帯びている。戦国期以前の土坑SK-07cと方向や形態が類似していることから、近い時期の所産の可能性も残る。覆土はローム粒を少量含む黒褐色土であった。土坑の底面は5cm前後の凹凸がある。

SK-11 (第24図、第10表)

調査地の南東部に単独で存在する方形土坑である。規模は南北1.2m、東西1m弱である。壁の立ち上がり



第24図 土坑実測図・出土遺物実測図

第9表 SK-05出土遺物観察表

No.	器種	大きさ(cm×g)	技術等	胎土	焼成	色調	残存率	注記
1	須恵器 高台付环	高台径： (6, 6)	内：ロクロナゲ。 外：底部回転角切り、高台貼り付け・ロク ロナゲ。三瓣型。	良好。白色細粒や や多量、白色粗粒 微量。	良好 内外：10YR4/1褐色 2/3	底部・高台	No.3 4	
2	須恵器 高台付环	高台径： (6, 6)	内：ロクロナゲ。 外：底部回転角切り、高台貼り付け・ロク ロナゲ。三瓣型。	良好。白色細粒多 量。	良好 内外：5YR5/3に 近い赤褐色	底 部・高台	No.5 1/4	

第10表 SK-11出土遺物観察表

No.	器種	大きさ(cm×g)	技術等	胎土	焼成	色調	残存率	注記
1	瓦		箇中下面は粘土を平行させており、焼成 されている。晋代の瓦。	良好。灰色粒少 量。	良好 外：10Y3/オ リーブ墨	一部	フク士	

第3章 発見された遺構と遺物

方に特徴があり、南辺のみ緩やかな傾斜で立ち上がるが、他の3辺の壁は垂直気味になっている。遺構確認面からの深さは約30cmあって、比較的深い掘り込みである。底面と壁の境は緩やかである。覆土は下層でロームを多く含んでおり、人為的に埋め戻されたと推定される。覆土から炭化した現代の瓦やトタン釘が出土したことから、現代の土坑と判断できる。

この他にも古代の瓦片が数点遺構外から出土している。

第4章 総括

第1節 ホクチャヤ遺跡 穫穴住居跡の時期と性格

(1) ホクチャヤ遺跡 穫穴住居跡の時期

台地先端部の今回の調査で、古代の竪穴住居跡が5軒発見された。これらの遺構からは土器も一定数確認され、地域的な特徴もあって須恵器が多くみられた。三毳山麓窯群の須恵器については、その編年も概ね研究されているので、これを基にして各遺構の時期を検討していく。

S I - 01 では、須恵器壺を4点掲載でき、その大きさは口径 12.5 ~ 14.2cm、底径 7.0 ~ 7.8cm である。器高は 3.7 ~ 4.0cm である。底部の調整は回転糸切り未調整か外周を手持ちか回転ヘラケズリする。この特徴は三毳窯編年の寂光沢2号窯に比定され、9世紀第2四半期に位置付けられている（津野 2011）。

S I - 03c では、底径 5.4cm の土師器の小皿と内面黒色処理の土師器壺の破片、須恵器の甕を図化できた。内面黒色処理の土師器壺の破片、須恵器の甕は9世紀代にみられるものであるが、黒色処理を行わない皿は10世紀以降に多くみられる。本遺構では出土した遺物が少なくて、その時期を確定し難いが、図化できた遺物の新しい方を探って、古い方と組み合わせれば、10世紀前葉頃の所産とみておきたい。

S I - 03d では、実測できた遺物が多い。須恵器壺は口径 13.4 ~ 14.2cm、底径 7.1 ~ 8.8cm、器高 3.6 ~ 4.3cm で、底部調整は回転糸切り未調整のものと外周手持ちヘラケズリするものがあるが、未調整のものの方が多い。この大きさを窯跡出土資料と比較すると、寂光沢3号窯では口径 11.4 ~ 15cm、底径 6.2 ~ 8.4cm で 7 ~ 9cm が主体である。底部は外周ヘラケズリが3分の2ほどを占める。同じく2号窯では口径 12 ~ 14cm、底径 6.8 ~ 8.0cm で 7 ~ 8cm が主体である。底部は外周ヘラケズリと糸切り未調整が拮抗している。本住居跡から出土した壺は2号窯よりも口径・底径ともにやや大きくて、3号窯に近い。底部調整は両窯とともに外周ヘラケズリと糸切り未調整があることから、本住居跡の時期は3号窯に近い時期とみられる。3号窯は8世紀第4四半期後半から9世紀第1四半期に位置付けられており、本住居跡もこの時期に比定しておく。土師器甕も頸部がくの字形を呈しており、9世紀代でも古相を呈している。

S I - 04 は、須恵器壺ではカマドから出土した4が口径 12.8cm、底径 7.8cm、器高 3.8cm で、底部回転糸切り未調整であり、寂光沢3号・2号窯の両窯に類似する。これに続く大芝原B地点では底径が7 ~ 8cm であって、これにも類している。8・9の土師器甕は口縁部・頸部がコの字形を呈しており、S I - 03d の10の土師器甕よりも後出である。土師器壺は口径 12cm前後、底径 6.0 ~ 6.8cm であり、小底化している。これらの点から本住居跡は S I - 03d に後続する9世紀中葉の所産と判断しておきたい。

S I - 12 は、須恵器壺が口径 12.9cm、底径 6.4 ~ 7.0cm、器高 4.0cm で、底部回転糸切り未調整である。底径が寂光沢2号窯で主体となる大きさよりも小さくて、後出するとみられ、大芝原B地点に比定することができる。この窯は9世紀後半に位置付けられており、本住居跡も9世紀後半の所産と判断することができる。

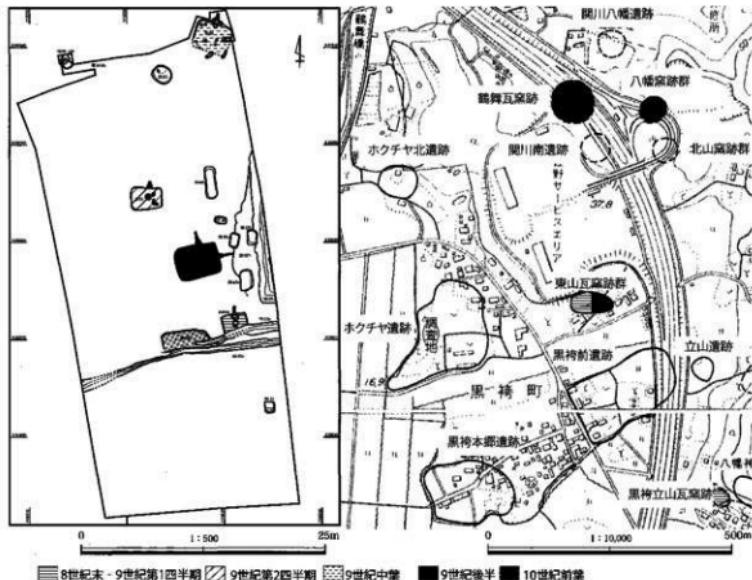
このような土器の検討結果をまとめると、8世紀第4四半期後半から9世紀第1四半期に S I - 03d、9世紀第2四半期に S I - 01、9世紀中葉に S I - 04、9世紀後半に S I - 12、10世紀前葉に S I - 03c と位置付けることができた。集落の遺構変遷という観点からみると、今回発掘した範囲では、8世紀第4四半期後半から9世紀第1四半期に始まり、10世紀前葉頃まで、各時期1軒のみであるが、細々と連続と統いていたことが明らかになった。今回発掘した位置は分布調査で括られた遺跡範囲の西端であり、調査地の東側の方に竪穴住居も寄って分布していることから、遺跡全体では今回の調査地の東側にさらに多くの竪穴

住居が分布していることが推測される。遺跡全体のことは推断できないが、8世紀末から9世紀を通じて小規模な集落が続いていることが確認できた。

(2) 周辺遺跡と工人集落（第25～27図）

ホクチヤ遺跡の近隣には瓦窯が複数存在する。瓦の編年から窯の時期が指摘されており、国分寺編年の1～2期（750～780年代）には町谷瓦窯・小名路瓦窯・大芝原窯跡・寂光沢窯跡、2～1期（790年代～9世紀第1四半期）に東山瓦窯の1・2・4号窯・三谷瓦窯・黒持立山瓦窯・ゼニゴ沢瓦窯、2～2期（9世紀第2四半期）に古江淨琳寺裏山窯・3期（9世紀後半）に鶴舞瓦窯・八幡瓦窯・東山瓦窯3・5号窯と時期的な位置付けがなされている（大橋1997）。このうち、町谷瓦窯は三毳山から西にのびる尾根の反対側に所在し、東山瓦窯は本遺跡から東に200m、黒持立山瓦窯は南東に500m、鶴舞瓦窯は北東に500m、八幡瓦窯は北東に600mの位置に所在する。『佐野市遺跡地図』（佐野市教育委員会1990）によれば、窯跡の近隣における奈良・平安時代の集落遺跡は少なくて、本遺跡の北側200mほどにホクチヤ北遺跡があり、鶴舞瓦窯などから山を降りて400～500mほどの位置になるが、遺跡範囲が狭くて小規模な遺跡である。窯跡は、三毳山から西にのびる尾根近くの斜面や山麓の裾に築かれている。ホクチヤ遺跡は山を降りた台地の先端にあり、ホクチヤ北遺跡は山裾を降りた所に立地しており、奈良・平安時代の集落遺跡としては、鶴舞瓦窯・八幡瓦窯・東山瓦窯に最も近い位置に所在している。このため、ホクチヤ遺跡はこれらの窯と密接に関わった工人集落の遺跡と考えられる。

先に検討した今回の住居跡の時期と併行する窯を挙げておけば、8世紀第4四半期後半から9世紀第1四



第25図 ホクチヤ遺跡 堅穴住居跡の時期と近隣の窯跡



第26図 黒待台遺跡 平安時代空穴住居変遷図（1）



第27図 黒待台遺跡 平安時代豎穴住居変遷図（2）

半期のS I - 03dには東山瓦窯1・2・4号窯と黒待立山瓦窯、9世紀第2四半期のS I - 01と9世紀中葉のS I - 04は近隣に窯場の候補がないが、9世紀後半のS I - 12では鶴舞瓦窯・八幡瓦窯・東山瓦窯3・5号窯が併行する時期に操業している。本遺跡は東山瓦窯と近距離にあり、工人が居住して、これらの窯で操業に従事していたと推定することができる。

このように窯跡と集落跡が隣接する遺跡としては、黒待立山瓦窯跡の北西250mほどの位置にある黒待前遺跡、瓦窯跡から南西に400～500mほどの位置に所在する黒待II遺跡や黒待台遺跡も挙げることができるであろう。黒待前遺跡は、土取りに際してカマド付きの豎穴住居跡が発見され（佐野市史編さん委員会1975）、格子叩き甌があることから、奈良時代の北山・八幡窯の時期の集落でもあったと推測される。2号住居跡では寂光沢3号から2号窯の須恵器坏、くの字形やコの字形口縁の土師器甌があって、9世紀前半から中頃の所産と推定される。さらに、遺跡の南端の低地部を調査した結果、八幡窯で確認できる二重巻線のある均整唐草文や長縄叩き平瓦が出土している（中村2017）ことから、9世紀後半にも集落であった可能性が指摘できる。時期的には黒待立山瓦窯や鶴舞瓦窯・八幡瓦窯・東山瓦窯3・5号窯の操業時期とほぼ併行しており、東山瓦窯まで200mほどの位置にあることから、ホクチヤ遺跡とともに工人集落の可能性がある。

黒待台遺跡は、周囲を浸食されてできた突起状の台地全面を発掘調査しており、奈良・平安時代の豎穴住居跡も多数発見されている。そこで、この遺跡の豎穴住居跡の時期的な変遷を示して、遺跡の動向をみていきたい。古代の住居は9世紀中葉から始まり、この時期の住居跡は台地の南東部で、窯に近い方に散在している。

9世紀後半になると住居が急増する。台地の中央部には古墳群があり、墳丘が残っていたのが、住居跡は希薄である。南西隅の住居では古墳の周溝上に築かれるものもあり、既に平安時代前期に周溝が埋まっていたと推測される。台地の南側縁辺部にまとまって住居の作られることが、この時期の特徴である。台地東端で窯に最も近い位置にある住居跡のS I - 171では、西側壁際の床面に粘土があった。窯場に近い場所で住居跡の壁際床面に粘土があることは、窯業で用いる粘土を寝かせていた可能性が高い。この時期には、長縄叩きの平瓦が多く出土している。繩叩き平瓦は鶴舞瓦窯や八幡瓦窯で出土しており、これらの窯との関連が想起される。しかし、この時期の住居跡は、現在確認されている窯やその範囲などから推測される操業数、及び9世紀代ということから、官衙や国分寺・尼寺などの修繕の実態と照らし合わせると、操業窯数に比して住居の数が多くて、全てが窯業に関わるものとは考えられない。そして、10世紀になると住居数も激減している。この時期には瓦・須恵器生産が終焉しており、窯業とは関わらない集落になって行った。

三杉川を挟んだ対岸にある摘田遺跡では、竪穴住居の床面で粘土が確認された（矢島 1992・津野 2011）。これも粘土を寝かせる遺構の可能性が高い。窯のある山の部分とやや距離があるが、周辺に複数の工房や工人集落が存在していたと考えられる。さらに、三毳山麓窯跡群の工人集落と推測される遺跡は栃木市の旧岩舟町小野寺に所在する寂光沢跡と関わる西根2遺跡がある（進藤・仲山 2009、津野 2011）。この遺跡も調査範囲で竪穴住居跡2軒のみで、9世紀後半になり、床面に粘土があった。

第2節 多彩釉陶器

本遺跡のS I - 01 からは三彩陶器の托の底部破片が出土した。遺構の時期は9世紀第2四半期に位置付けられる。三彩陶器の終焉に関しては平安時代初期という説が多い（田中 1979・植崎 1989・異 2007など）が、9世紀まで平安三彩として継続したとする説もある（矢部 2000）。ここで奈良三彩の終焉時期を説けないが、通説の平安初期終焉説に従えば、出土した住居跡の時期から判断すると、數十年程度は伝世していたと考えられる。奈良三彩が出土する遺跡によって、小壺など小型品が集落遺跡から出土するタイプ、瓶など大型品が寺院から出土するタイプ、藏骨器と分類する見解があるが（高橋 1994）、奈良三彩は本来寺院で使用するものとして、寺院との関係を通じて官衙・集落に伝播したとする見解もある（吉田 2001）。また、隣県の群馬県では出土数が多くて、寺院への下廻・祭祀・焼く行為などと遺跡に基づいて使い方を示した見解もある（神谷 2018）。ここで、全国的な動向から位置付けることはできないので、神谷氏により提起された課題点について、少ないながら栃木県内の資料から考えてみたい。

（1）最終的な使用時期

県内の数例の出土品から最終的な使用時期、伝世期間を見てみる。日光男体山山頂遺跡では二彩の小壺が出土している（斎藤ほか 1963）。男体山山頂遺跡は勝道上人が天応2年（782）に初めて山頂をきわめたといいう。出土した最も古い土器は、本県域の編年でも8世紀後半に位置付けられるものであり、史料の記載するところと時期的に概ね一致している。山頂遺跡からはその後の平安時代の遺物も多いが、二彩の小壺は伝世せずに山頂に奉斎された可能性もある。

下野薬師寺跡では、講堂の中心位置にあった1819土器集積遺構から二彩の托が出土している。ここでの土器類について報告では、講堂かその周辺で使用後に建物内に収納されたまま遺棄されたとみている（藤木 2004）。これらには9世紀代の須恵器も含むが、土師器は概ね10世紀前半のものであり、この托は1世紀以上にわたる伝世期間が想定される。講堂南面落下瓦からも三彩小壺が出土した。ともに出土した土器は、ロクロ使用・内面黒色処理の土師器壺や非黒色処理の壺、須恵器壺の形態などから9世紀後半から10世紀

前葉頃を一部含む。このため三彩小壺は講堂付近で半世紀から1世紀にわたり使用されていたと推定される。この他にも西回廊北地区の遺構外から三彩小壺が1点出土している。このように下野薬師寺では講堂内などで三彩・二彩陶器が仏具として使用されていたことが想定される。

足利市の助戸・勘農遺跡は、足利郡家と推定されている国府野遺跡に近接する位置にあり、三彩は小壺の蓋片である（前澤ほか 1984）。三彩の出土した4号住居跡は土器から8世紀後半から9世紀前半の所産と推定される。このため、長期の伝世期間は考え難い。

薄市遺跡は、県央部河内郡の上三川町に所在する（秋元 1988）。三彩は小壺の肩部片であり、出土した3Y-23住居址は出土した土器に小型の皿やコの字形口縁の土器師窯があることから9世紀中葉の所産と判断される。このため、ここの小壺は半世紀以上伝世していた可能性がある。

ホクチヤ遺跡では9世紀第2四半期の竪穴住居跡から出土しており、少なくとも数十年程度の伝世品とみられる。

真岡市中根北遺跡では9世紀後葉の竪穴住居跡S I-3から三彩の托が出土している（真岡市教育委員会 2016）。1世紀前後の伝世期間があったとみられ、欠損後に灯明具として使われている。

この他にも宇都宮市西刑部上原遺跡でも竪穴住居跡から三彩小壺が出土している（水野ほか 2009）。

数が少ないが、栃木県内で出土した二彩・三彩について伝世期間を見てみた。その結果、郡家に隣接する助戸・勘農遺跡では伝世期間がほとんどなく、薄市遺跡やホクチヤ遺跡という集落遺跡では半世紀前後、下野薬師寺跡では1世紀以上にわたる保有であった。集落の民衆よりも薬師寺の方が保管期間が長いということは、多彩釉陶器は寺で用いる仏具であり、寺の資材として管理・収納されていたことが推測される。

（2）出土遺跡の性格

多彩釉陶器出土遺跡の性格から本遺跡出土三彩の性格を考えてみたい。日光男体山山頂遺跡は8世紀後葉頃から中世まで続く祭祀遺跡である。三彩小壺は1点のみ報告されている。主体ではないが祭祀品として用いられていたことを示唆する。

下野薬師寺跡では、出土した位置が講堂や回廊付近であり、特に前者の托や小壺は講堂での供養具として用いられたことを示している。

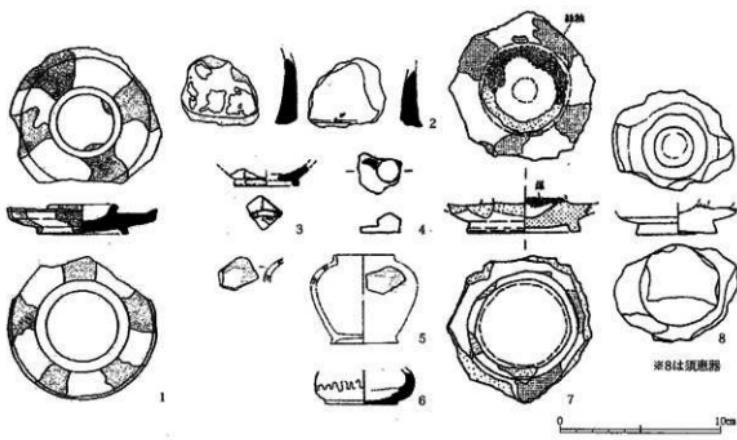
集落遺跡出土品では、助戸・勘農遺跡は礎石立の縦柱建物群が発見された国府野遺跡に近い位置にある。この遺跡は、足利郡家の正倉とみられ、付近に郡庁なども推定される。このような郡の中心域に所在する遺跡であり、住居も密集する。しかし、遺跡は竪穴住居のみで構成され、掘立柱建物は確認されていない。

薄市遺跡は河内郡家とも離れた郡内の集落遺跡である。古墳時代後期から9世紀まで続き、8世紀の住居跡（4A-13b）では「寺」銘墨書き土器や瓦塔が出土した。このため、三彩小壺は民衆の仏教信仰の場に持ち込まれて、使用されたと推定することができる。9世紀前半代の遺構から仏教関係の遺物は確認できないが、三彩の出土した竪穴住居の時期、9世紀中葉まで集落の中で民衆によって保持され続けたと考えられる。

ホクチヤ遺跡は、県内有数の規模を誇る三毳山麓窯跡群の西端に位置しており、窯業に従事した工人集落であると推定した。集落規模は調査した範囲では閑散とした景観である。

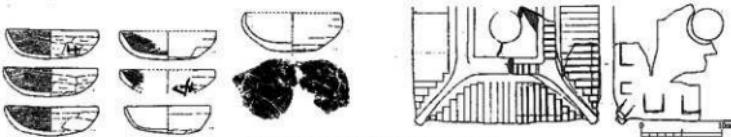
中根北遺跡は仏堂とみられる建物も確認されており、民衆が三彩の托を仏具として使用していたと推定される。

以上のように、栃木県内で二彩・三彩の出土した遺跡について概観してきた。これらを類型的にしてみると、祭祀遺跡、官寺、村落内寺院か仏教信仰集落、郡家関連集落、工人集落と分類することができる。日光男体山山頂遺跡はその奉斎品から見ても国家的な祭祀遺跡であり、薬師寺も東日本の仏教の中核となる寺院であ



1・2・3 下野葉師寺跡 4 助戸・鶴農遺跡 5 薄市遺跡 6 日光男体山山頂遺跡 7 中根北遺跡 8 寂光沢窯跡

第28図 栃木県出土の多彩釉陶器



第29図 薄市遺跡の仏教関係遺物

る。これらの遺跡へ多彩釉陶器が持ち込まれるのは、国家的な関与が背景にあったことが容易に想定できる。村落内寺院か仏教信仰集落や郡家間連集落へは、寺院との関係を通じて官衙・集落に伝播したとする吉田恵二氏の見解に沿ったものと推定される。

問題は、工人集落と推定したホクチヤ遺跡に全国的にも20例ほどしか出土事例のない托が（井上2001）持ち込まれた理由である。三毳山麓の窯跡のうち寂光沢窯跡で須恵器托が生産されている（津野2011）。この托は表採品のために時期は明らかでないが、窯の時期によって8世紀末から9世紀前半頃のものと推定される。須恵器を生産していること、工人集落で三彩の托を保有していたこと、下野国内の事例からは多彩釉陶器は郡国が関わっていたことから以下のように想定したい。三毳窯の瓦生産は、国分寺創建段階には郡名瓦が造られるように各郡が集約して三毳窯で瓦生産を行った。9世紀には「国分寺」「葉師寺」瓦のように送り先を分類する国の関与の強い生産体制に変化した（津野2014）。郡が窯業生産の主体であっても、国の関与のあった窯に、仏器生産の見本として希少な三彩托が渡されたものと推定したい。古代の見本は様と呼ばれ、木で造られる場合もあった。窯業の場合は現物が見本として窯場に持ち込まれることがあり、三彩陶器は希少な器種である托の見本であったと推定される。三毳窯の寂光沢窯跡では埼玉県南比企産の須恵器甕や愛知県猿投産の灰釉陶器甕が出土している。この窯場では製作技法でも南比企窯との類似点があり、見本を持った工人の移動なども想定される。この様に、窯場や関連集落から出土する希少な搬入品は技術移転を復元する資料となると思う。

第3節 堀跡と黒袴藤岡城跡

今回の調査で、堀跡が発見された。ここではその時期を遺物から検討してみる。SD-07aは南北から東西に規格的に折れており、通常の地境溝とは異なった性格が想定される。ここからはかわらけの小破片と石白片が出土したのみである。第23図2のかわらけはロクロ使用で、底径6cmに復元され、内面底部と体部境は不明瞭である。この時期のかわらけは、皿形もしくは环形では内面底部と体部境が不明瞭なものがあるが、小皿形と分類される小口徑のものは内面の底部外周で指による押圧・ロクロナデを行い、体部との境が窪む形態が多い。大澤伸啓氏の下野全城を対象とした編年図でもこの点が明瞭である（大澤2003）。このため、2のかわらけは小皿ではない器種と判断する。皿で底径6cmのものは先述大澤氏による足利市域の編年図で7期 15世紀前半に類似する。それよりも古い皿形の底径は大きい傾向がみられる。降って戦国期を主体とする唐沢山城跡出土かわらけでは（出居ほか2013）、第99図に詳細な分類と多様な大きさ・形態が示されている。本遺跡の堀跡出土かわらけの特徴と類似するものとしてはIV-A類やIV-B類を挙げができる。しかし、微細にはIV類でも多くは内面の底部・体部境に窪みがみられる点に相違がある。さらに降って慶長期の佐野城跡出土かわらけでは、やはり底部・体部境に窪みのある形態が多いが、三ノ丸中央区の皿形には窪みのない底径6~7cmほどのものがある。

本遺跡の堀SD-07aから出土したかわらけの小片から時期的な限定は困難であるが、大澤氏編年の7期から慶長期の間の所産であることは推定できるであろう。さらに、堀の南辺とほぼ平行して東西にのびる溝SD-03a・bからは内耳土器や底径5~6cmのかわらけが出土している。内耳土器は口縁部の厚さや体部の遊び方などから、江戸時代の焙烙ではなくて、戦国期以前のものとみられる。これらの点から、堀と溝跡の時期は15~16世紀前後のものと判断しておきたい。

『佐野市史 資料編1』（佐野市史編さん委員会1975）によれば、文明3年（1481）に藤岡秀行が上野国葛野郡藤岡から移封されて佐野黒袴に来たという。その後、66年間藤岡氏が居城して、旧地に戻った。その後には佐野氏の家臣である大貫大隅守政重があり、孫の政宗の時代、天正13年（1585）に小田原北条氏と戦い、敗北・廃城になったという。この様な経緯と本遺跡の堀・溝の時期は併行することから、堀・溝は黒袴藤岡城跡の西端の一画と判断しておきたい。

参考文献

- 秋元陽光 1988『薄市遺跡・大山遺跡』上三川町教育委員会
- 出居 博ほか 2013『唐沢山城跡 調査報告書』佐野市教育委員会
- 井上喜久男 2001『東国官衙遺跡にみる三彩・綠釉陶器』『月刊考古学ジャーナル』No.475
- 大澤伸啓 2003『下野国におけるかわらけの変遷－中世前期を中心として－』『栃木の考古学－堀 静夫先生 古稀記念論文集－』
- 大橋泰夫 1997『下野国分寺跡XII瓦・本文編』栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団
- 神谷佳明 2018『群馬県出土の三彩陶器について』『研究紀要』36(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 斎藤 忠ほか 1963『日光男体山 山頂遺跡発掘調査報告書』角川書店
- 佐野市教育委員会 1990『佐野市遺跡地図』
- 佐野市史編さん委員会 1975『佐野市史 資料編1』佐野市
- 邊藤敏雄・仲山英樹 2009『西根2遺跡・小野寺城跡』栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団
- 須田 勉ほか 2004『史跡 下野薬師寺跡』南河内町教育委員会

- 高橋照彦 1994「東国の施釉陶器」『古代の土器研究会第3回シンポジウム 施釉陶器』
- 異澤一郎 2007「奈良三彩」『歴史考古学辞典』吉川弘文館
- 田中 琢 1979「三彩・綠釉」『世界陶磁全集2 日本古代』小学館
- 津野 仁 2011『寂光沢窯跡』栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団
- 津野 仁 2014『下野国分尼寺跡Ⅱ』栃木県教育委員会・(公財)とちぎ未来づくり財团
- 中村享史 2017『黒持台遺跡・黒持前遺跡』佐野市教育委員会・(公財)とちぎ未来づくり財团
- 横崎彰一 1989「概説」「日本の陶磁器 古代中世篇2 三彩 緑釉 灰釉」中央公論社
- 藤木 海 2004「土器類」「史跡 下野薬師寺跡！」南河内町教育委員会
- 前澤輝政・田村允彦・大澤伸啓 1984「助戸・勤農遺跡第1次発掘調査」『昭和58年度埋蔵文化財発掘調査報』足利市遺跡調査部・足利市教育委員会
- 水野順敏・柏崎広伸 2009「根本西台古墳群・西刑部上原遺跡」『宇都宮市文化財年報 第24号〔平成19年度〕』宇都宮市教育委員会
- 真岡市教育委員会 2016「中根北遺跡」
- 矢島俊雄 1992『猪田遺跡・宮西遺跡』佐野市教育委員会
- 矢部良明 2000『日本の美術 No.408 唐三彩と奈良三彩』至文堂
- 山口良明 2002『佐野城跡（春日岡城）Ⅱ』佐野市教育委員会
- 吉田恵二 2001「奈良三彩の生産と伝播」『月刊 考古学ジャーナル』No.475

付編 ホクチヤ遺跡発掘調査に係る火山灰分析

(株)火山灰考古学研究所

1. はじめに

関東地方北部に位置する栃木県域には、男体山や日光白根山をはじめとする日光火山群、赤城、榛名、浅間など北関東地方とその近辺に分布する火山のほか、中部地方や中国地方、さらには九州地方など遠方に位置する火山から噴出したテフラ（火山碎屑物、いわゆる火山灰）が数多く降灰している。とくに、後期更新世後半以降に降灰したそれらの多くについては、層相や年代さらに岩石記載的特徴がテフラ・カタログ（町田・新井, 1992, 2003, 2011）などに収録されており、わが国の第四紀研究を特徴づける火山灰編年学の手法によって、堆積物のほか、考古遺物包含層や遺構の層位解明や年代推定ができるようになっている。

そこで、層位や年代が不明な土層が検出された佐野市ホクチヤ遺跡においても、地質調査を実施して土層観察を行い、高純度試料を採取するとともに、実験室内でテフラ分析（火山ガラス比分析）を実施して、すでに年代が明らかにされている指標テフラの検出同定を行い、土層の層位や年代に関する基本的データを収集することになった。調査分析の対象は深掘トレンチ1～3の3地点である（12頁・第8図）。

2. 調査分析地点の土層層序

（1）深掘トレンチ1

深掘トレンチ1では、基盤岩の上位に、下位より暗褐色粘質土（層厚12cm）、礫混じり灰褐色粘質土（層厚9cm、礫の最大径16mm）、色調がとくに暗い暗灰色粘質土（層厚16cm、礫の最大径13mm）、礫混じり暗灰褐色粘質土（層厚8cm、礫の最大径12mm）、暗灰褐色粘質土（層厚13cm、礫の最大径10mm）、礫混じりでやや暗い灰褐色粘質土（層厚18cm、礫の最大径8mm）、礫混じりでやや赤みをおびた灰褐色粘質土（層厚5cm、礫の最大径6mm）、褐色土ブロック混じりでやや赤みをおびた灰褐色粘質土（層厚13cm）が認められる（図1）。その上面には凹凸が認められ、さらに上位に灰褐色土（層厚9cm）、褐色がかった灰土（層厚14cm）、褐色表土（層厚3cm）が形成されている。

（2）深掘トレンチ2

深掘トレンチ2では、下位より礫混じりでやや暗い褐色粘質土（層厚13cm以上、礫の最大径21mm）、やや灰色がかった褐色粘質土（層厚14cm）、灰褐色粘質土（層厚18cm）、やや灰色がかった黄褐色土（層厚13cm）、やや褐色がかった灰色表土（層厚16cm）が認められる（図2）。

（3）深掘トレンチ3

深掘トレンチ3では、マンガンブロックを多く含み、上面に凹凸のある黄色粘質土（層厚16cm以上）が認められ、その上位に、黄色粘質土ブロック混じり暗灰褐色土（層厚15cm）、暗灰褐色土（層厚20cm）、やや暗い灰褐色土（層厚11cm）、灰褐色表土（層厚11cm）が認められる（図3）。

3. 火山ガラス比分析

（1）分析試料と分析方法

深掘トレンチ 1～3 で採取された試料のうちの試料 17 点を対象に、テフラ粒子の量や特徴を定性的に把握するテフラ検出分析を行った。その後、テフラ粒子を含む可能性が高い試料 12 点について、火山ガラスの形態別（一部色調別）含有率、さらに軽鉱物および重鉱物の含有率を求める火山ガラス比分析を実施した。分析の手順は次の通りである。

- 1) 試料 10g を電子天秤で秤量。
- 2) 超音波洗浄により泥分を除去。
- 3) 恒温乾燥器を用いて 80℃で乾燥。
- 4) 実体顕微鏡下でテフラ粒子の量や特徴を観察（テフラ検出分析）。
- 5) 火山ガラス比分析対象試料について、1/4mm-1/8mm と 1/8-1/16mm の粒子を篩別。
- 6) 1/4mm-1/8mm の 250 粒子を偏光顕微鏡で観察して、火山ガラス（形態色調別）、軽鉱物、重鉱物の含有率を求める（火山ガラス比分析）。

（2）分析結果

1) テフラ検出分析

テフラ検出分析の結果を表 1 に示す。深掘トレンチ 1 では、上部の試料 9 および試料 7 から分厚い中間型ガラスをごくわずかに検出した。その色調は淡灰色や無色透明である。これらの試料では、不透明鉱物以外の重鉱物（以下、重鉱物とする）として、斜方輝石と単斜輝石が認められた。一方、それより下位の重鉱物では、斜方輝石や角閃石が認められる。

深掘トレンチ 2 では、最上部の試料 3 でスポンジ状に良く発泡した灰白色軽石型ガラスがごく少量認められた。この試料に含まれる重鉱物には、斜方輝石や角閃石のほかにごく少量の単斜輝石がある。また、これより下位試料では、斜方輝石や角閃石が認められる。

深掘トレンチ 3 では、試料 10、試料 6、試料 4 から火山ガラスがごく少量ずつ検出された。試料 10 に含まれる火山ガラスは無色透明のバブル型である。試料 6 では淡灰色や無色透明の中間型、試料 4 では淡灰色のスポンジ状軽石型ガラスがごくわずかに認められる。

2) 火山ガラス比分析

火山ガラス比分析の結果をダイヤグラムにして図 4 に、また分析結果の内訳を表 2 に示す。深掘トレンチ 1 では、試料 21 をのぞくいずれからも火山ガラスを検出できた。火山ガラスの含有率は上位ほど高い傾向にあり、中間型や無色透明のバブル型ガラスが認められた。また、試料 13 以上からスポンジ状や纖維束状の軽石型ガラスが検出された。このうち、試料 9 や試料 7 で火山ガラスの含有率が高く（8.0%、11.2%）、試料 7 には含有率が高い順に中間型（9.2%）、スポンジ状および纖維束状の軽石型（各 0.8%）、無色透明バブル型（0.4%）の火山ガラスが含まれている。全体的に、軽鉱物および重鉱物の含有率も上位ほど高くなる一方で、風化鉱物や細粒の岩片など他の粒子が占める割合は減少する。

深掘トレンチ 2 では、試料 5 と試料 3 から火山ガラスが低率で検出された（1.2%、2.4%）。いずれにも中間型や纖維束状軽石型が含まれているほか、試料によって無色透明のバブル型やスポンジ状軽石型が認められる。軽鉱物や重鉱物の含有率は低めの傾向にある。また、深掘トレンチ 3 では、いずれの試料からも火山ガラスが検出された、火山ガラスは中間型や纖維束状軽石型で、試料によって無色透明バブル型やスポンジ状軽石型も認められる。軽鉱物および重鉱物の含有率は高い傾向にある。

4. 考察

(1) おもなテフラ粒子の由来について

テフラ検出分析や火山ガラス比分析により検出された火山ガラスや鉱物の中には、これまでの調査周辺におけるテフラの調査分析からおおよそ起源を推定できるものがある。そのうち、代表的なものは珪長質マグマによる巨大噴火の産物である無色透明のバブル型ガラスで、その形態や色調から、約2.8～3万年前に南九州地方の姶良カルデラから噴出した姶良Tn火山灰(AT, 町田・新井, 1976, 1992, 2011など)に由来すると考えられる。ただし、その降灰層準を示すような顕著な濃集層準は認められなかった。

また、分厚い中間型やそれに伴う可能性のある今回検出されたやや分厚い纖維束状軽石型の火山ガラスは、約2万年前後の浅間大窪沢第軽石群(As-Ok Group, 中沢ほか, 1984, 早田, 1996, 2016, 町田・新井, 1992, 2011)や、約1.5～1.65年前の浅間板鼻黄色軽石(As-YP, 新井, 1962, 町田・新井, 1992, 2011など)など浅間火山のテフラに由来する可能性が高い。このタイプの火山ガラスは、深掘トレンチ1の試料9や試料7で比較的高率で認められた。

これらのはか、今回は認められなかった腐植質土層の下位に層位のある後期更新世後半のテフラに限れば、斜方輝石と単斜輝石の組合せはATの降灰後に活動が活発化した浅間火山、また斜方輝石と角閃石の組合せは、榛名火山や赤城火山のテフラに特徴的に認められる。栃木県内で確認されているテフラのうち、前者には浅間火山軽石流期のテフラ群のほかに、約2.4～2.9万年前の間に噴出した浅間板鼻褐色軽石群(As-BP Group, 新井, 1962, 町田・新井, 1992, 2011早田, 2016など)がある。また、後者については、約5万年前に榛名火山から噴出した榛名八崎軽石(Hr-HP, 新井, 1962, 町田・新井, 1992, 2011など)や、約4.5万年前以前に赤城火山から噴出した赤城鹿沼軽石(Ag-KP, 新井, 1962, 町田・新井, 1992, 2011など)が代表的なものである。

(2) 調査地点の土層の状況

深掘トレンチ1では、下位から上位にかけて全体的に重鉱物と重鉱物の割合が増加し、その他の粒子の割合が現象する傾向が伺える。この傾向は、基盤岩の上位に形成された土壤のそれと矛盾しない。その色調は暗色で、一般的にATより上位の明色のものとは異なる。また、暗色の土層中にATの顕著な濃集は認められず、浅間火山軽石流期の火山ガラスとともに、試料15から試料13にかけて低率(上方に向かってやや高率化)で含まれている。また、AT上位のAs-BP Group降灰層準によく認められる斜方輝石および単斜輝石で特徴づけられる重鉱物の濃集も認められない。

のことから、深掘トレンチ1の試料13が採取された土層以下は、角閃石が比較的目立つことも合わせると、本来はATより下位と推定される。そして、上位からの植物の根や土壤生物の活動による混入などによりATや浅間火山軽石流期のテフラがわずかに混在することになった可能性がある。もちろん、ATに由来する可能性が高い無色透明バブル型ガラスが微量ながら検出された試料15の採取層準全体が、最終的には浅間火山軽石流降灰後に形成された可能性が高いのではあるが、もともとはAT降灰前の土壤と思われる。

一方、試料9が採取された土層以上では、浅間火山軽石流期の火山ガラスの含有率が比較的高く、浅間火山軽石流期以降に形成された土層と考えて良いように思われる。AT降灰層準やAs-BP Group降灰層準が認められないことは、それらの土層が浸食により失われていると考えられる。

深掘トレンチ2では、明色なことからATの検出が期待された土層(試料9)から、ATに特徴的な無色透明のバブル型ガラスは検出されなかった。また、重鉱物の含有率が低いことも、ATより下位の土層の可能

性が高いことを示している。それより上位の試料5や試料3で無色透明のバブル型や中間型ガラスなどが認められたことから、試料5以上の土層の形成はAT降灰後と考えられる。ここでも、ATやAs-BP Groupの顕著な濃集が認められないことから、これらの降灰層準が浸食により失われている可能性が高い。

なお、表土直下のやや灰色がかった黄褐色土中にごくわずかに含まれる灰白色のスポンジ状軽石型ガラスは、その特徴から3世紀後半に浅間火山から噴出した浅間C軽石（荒牧、1968、新井、1979、坂口、2010など）に由来する可能性がある。

深掘トレンチ3の最下位の土層（試料14）からATは検出されず、それを覆うやや腐植質の土層以上でATや浅間火山に由来する可能性の高いテフラ粒子を検出した。この上位の土層では、軽鉱物の割合が大きく重鉱物の割合が低いこと、また斜方輝石のほかに单斜輝石が多く含まれていることから、浅間火山軽石流期以降に形成された可能性が高い。また、試料4からごくわずかに検出された淡灰色のスポンジ状軽石型ガラスは、その特徴から、1108（天仁元）年に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ（As-B、荒牧、1968、新井、1979など）に由来する可能性がある。

5.まとめ

佐野市ホクチヤ遺跡の発掘調査区において、地質調査を行うとともに、高純度で採取した試料についてテフラ分析（火山ガラス比分析）を実施した。その結果、榛名八崎軽石（Hr-HP、約5万年前）、赤城鹿沼テフラ（Ag-KP、約4.5万年前以前）、始良Tn火山灰（AT、約2.8～3万年前）、浅間大窪沢軽石群（As-OK Group、約2万年前前後）、浅間板鼻黄色軽石（As-YP、約1.5～1.65万年前）、浅間C軽石（As-C、3世紀後半）、浅間Bテフラ（As-B、1108年）などに由来する可能性が高いテフラ粒子を検出できた。本遺跡は開析が進んだ丘陵状の地形上に位置しており、本来のATや浅間板鼻褐色軽石群（As-BP Group、約2.4～2.9万年前）の降灰層準が、浸食により多くの地点で失われているものと推定される。

文献

- 新井房夫（1962）関東盆地北西部地域の第四紀編年。群馬大学紀要自然科学編、10, p.1-79.
- 新井房夫（1979）関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層。考古学ジャーナル、no.53, p.41-52.
- 荒牧重雄（1968）浅間火山の地質。地図研専報、no.14, p.1-45.
- 町田 洋・新井房夫（1976）広域に分布する火山灰—始良Tn火山灰の発見とその意義ー。科学、46, p.339-347.
- 町田 洋・新井房夫（1992）「火山灰アトラス」。東京大学出版会、276p.
- 町田 洋・新井房夫（2003）「新編火山灰アトラス」。東京大学出版会、336p.
- 町田 洋・新井房夫（2011）「新編火山灰アトラス（第2刷）」。東京大学出版会、336p.
- 中沢英俊・新井房夫・遠藤邦彦（1984）浅間火山、黒斑～前掛期のテフラ層序。日本第四紀学会講演要旨集、no.14, p.69-70.
- 坂口 一（2010）高崎市・中居町一丁目遺跡周辺集落の動向—中居町一丁目遺跡H22の水田耕作地と周辺集落との関係ー。群馬県埋蔵文化財調査事業団編「中居町一丁目遺跡3」, p.17-22.
- 早田 鮎（1996）関東地方～東北地方南部の示標テフラの諸特徴ーとくに御岳第1テフラより上位のテフラについてー。名古屋大学加速器質量分析計業績報告書、7, p.256-267.
- 早田 鮎（2016）浅間板鼻褐色軽石群（As-BP Group）の層序と前権泥流堆積物の層位。岩宿博物館・岩宿フォーラム実行委員会編「ナイフ形石器文化の発達期と変革期—浅間板鼻褐色軽石群降灰期の石器群」, p.6-14.

付録

表1 テフラ検出分析結果

地点	試料	斜石・スコリア			火山ガラス			重結晶物 (不透明結晶以外)
		量	色調	最大径	量	形態	色調	
深掘トレンチ1	7				*	md	淡灰	opx, cpx
	9				*	md	淡灰, 無色透明	opx, cpx
	13							opx, am
	15							opx, am
	17							am, opx
	21							(am, opx)
	23							(am, opx)
深掘トレンチ2	25							(am, opx)
	3				(*)	pm(sp)	灰白	opx, am, (opx)
	5							opx, am
	9							opx, am
	11							opx, am
深掘トレンチ3	13							opx, am
	4				(*)	pm(sp)	淡灰	opx, am, opx
	6				(*)	md	淡灰, 無色透明	opx, am, opx
	10				(*)	bw	無色透明	opx, am, opx
	14							(opx)

****:とくに多い, ***:多い, **:中程度, *:少ない, (*):非常に少ない, bw:バブル型, md:中間型, pm:鏡石型, sp:スポンジ状, fb:繊維束状, ol:カラン石, opx:斜方輝石, cpx:単斜輝石, am:角閃石, bi:碧玉母。重結晶物の()は、量が少ないと示す。

表2 火山ガラス比分析結果

地点	試料	bw(cl)	bw(pb)	bw(br)	md	pm(sp)	pm(fb)	軽結晶物	重結晶物	その他	合計
深掘トレンチ1	7	1	0	0	23	2	2	105	77	40	250
	9	1	0	0	16	2	1	108	72	50	250
	13	2	0	0	2	1	2	69	85	89	250
	15	1	0	0	4	0	0	84	63	98	250
	17	0	0	0	2	0	0	65	64	119	250
	21	0	0	0	0	0	0	84	31	135	250
	3	3	0	0	1	1	1	64	55	125	250
深掘トレンチ2	5	0	0	0	2	0	1	82	65	100	250
	9	0	0	0	0	0	0	84	40	126	250
	10	1	0	0	7	1	1	114	55	72	250
深掘トレンチ3	4	0	0	0	5	0	1	104	42	97	250
	6	1	0	0	3	0	2	123	39	82	250

bw:バブル型, cl:無色透明, pb:淡褐色, br:褐色, md:中間型, pm:鏡石型, sp:スポンジ状, fb:繊維束状, 数字は粒子数。

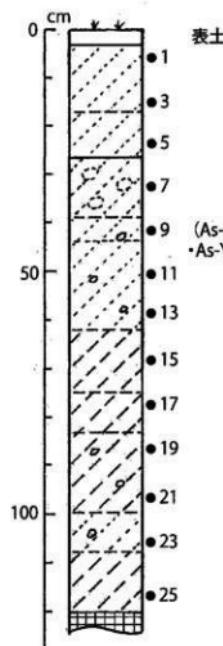
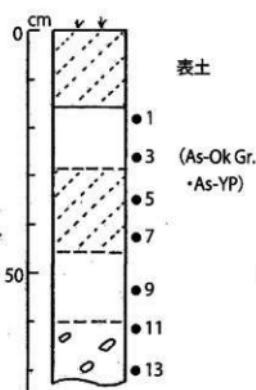
図1 深掘トレンチ1
の土層柱状図

図2 深掘トレンチ2

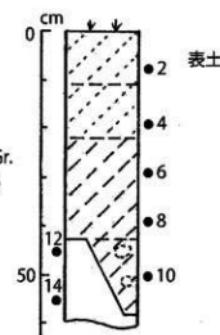
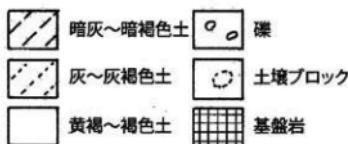


図3 深掘トレンチ3



●: テフラ分析試料の層位。数字: テフラ分析の試料番号。

付録

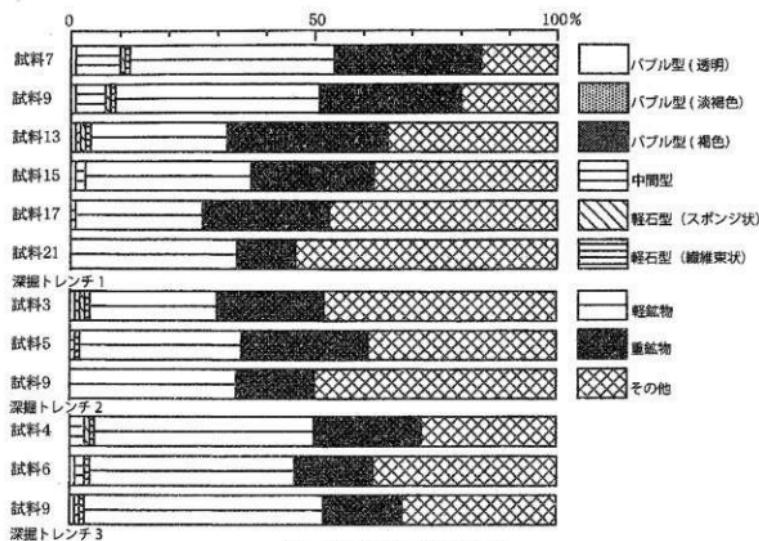


図4 火山ガラス比ダイヤグラム

ホクチャ遺跡火山灰分析写真図版

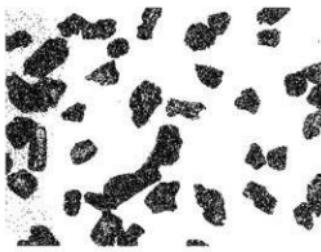


写真1 深掘トレンチ1・試料7(透過光)
中央左: 中間型ガラス。
中央右: 繊維束状軽石型ガラス

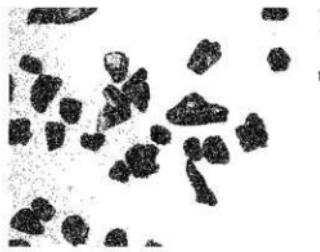
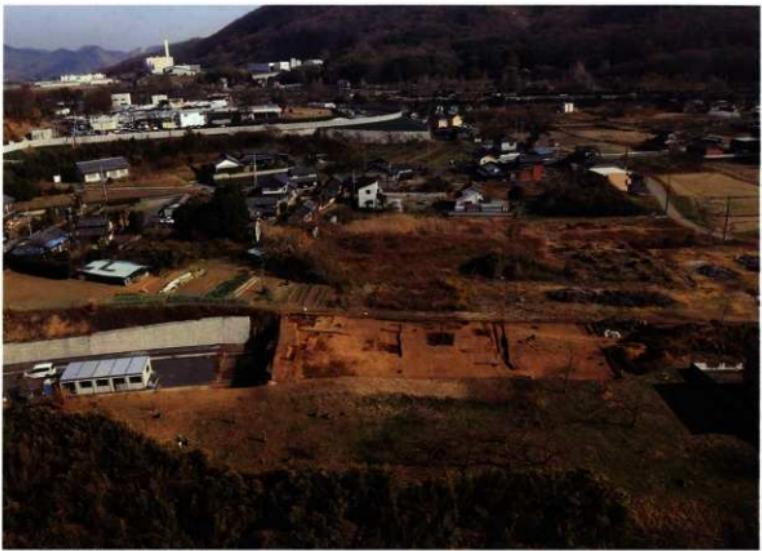


写真2 深掘トレンチ1・試料15(透過光)
中央左: 無色透明バブル型ガラス。
中央右: 中間型ガラス

写 真 図 版



ホクチヤ遺跡遠景（南西から）



ホクチヤ遺跡遠景（東から）

図版二
遺跡遠景二



旧越名沼と遺跡遠景（南西から）



ホクチヤ遺跡調査地全景（上空から）



S I - 01 完掘（東から）



S I - 01 セクション（東から）



S I - 01 遺物出土状況（南から）



S I - 01 三彩陶器出土状況（西から）



S I - 01 完掘（南西から）



S I - 01 セクション・遺物出土状況（西から）



S I - 01 P - 2 遺物出土状況（西から）



S I - 01 カマド（南から）

図版四
遺構二



S I - 03c セクション（南西から）



S I - 03c カマド痕（西から）



S I - 03d 完掘（南東から）



S I - 03d カマド（南から）



S I - 04 炭化物出土状況（南西から）



S I - 04 カマド（南から）



S I - 04 カマドセクション（東から）



S I - 04 遺物出土状況（南西から）

図版五
遺構三



S I - 04 遺物出土状況（南から）



S I - 04 須恵器甕出土状況（南から）



S I - 12 完掘（南から）



S I - 12 セクション（西から）



S I - 12 北カマド（南東から）



S I - 12 北カマド（南から）



S I - 12 東カマド（南から）



S I - 12 東カマド（南西から）

図版六
遺構四



S I - 12 東カマド（南西から）



S K - 05 セクション（南西から）



SD - 03 a・b セクション（西から）



SD - 07a セクション（南から）



SD - 07a 完掘（北西から）



縄文土器

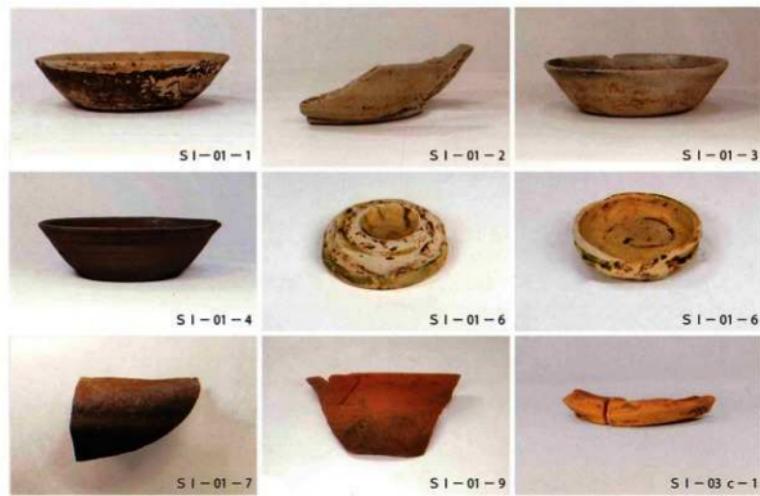


石器 1~9

圖版八
遺物二



石器 10 ~ 17





圖版十
遺物四



報告書抄録

ふりがな	ほくちやいせき
書名	ホクチヤ遺跡
副書名	快速で安全な道づくり事業費（補助）一般県道佐野環状線黒持工区に伴う発掘調査
卷次	
シリーズ名	栃木県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第393集
編著者名	津野仁
編集機関	公益財団法人とちぎ未来づくり財団 埋蔵文化財センター
所在地	〒329-0418 栃木県下野市紫474番地 TEL 0285-44-8441
発行機関	栃木県教育委員会 公益財団法人とちぎ未来づくり財団
発行年月日	西暦 2019年6月28日（令和元年6月28日）

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ一ド 市町村 遺跡番号	北緯 度 經 度	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
ホクチヤ 遺跡	佐野市 黒持町	0924	6499 36°18'54"	139°36'57" 2018.11.02～ 2018.12.27	1,086m ²	県道改良工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
ホクチヤ 遺跡	集落跡 城跡	古代 中世～戦国	竪穴住居跡5軒 堀・溝4条 土坑9基	三彩・土師器・須恵器・ 銅釘 かわらけ・中世陶器	古代集落 戦国時代の 黒持藤岡城 跡

要約	古代は、調査した位置が集落の西端であるが、竪穴住居が8世紀末から9世紀まで続き、小規模で閑散とした景観であった。遺跡は三毳山麓窯跡群の西端にあり、瓦窯まで近距離であって、集落の営まれる時期に瓦窯も操業されていることから、窯業に従事する工人の集落と考えた。
	9世紀第2四半期の住居跡から三彩陶器の扱が出土した。県内出土多彩釉陶器の出土した遺跡をみると、伝世する場合が多く、本遺跡の三彩も伝世期間があった。また、県内では祭祀遺跡や寺院などから確認できるが、窯業の工人集落出土三彩扱は初出で、須恵器扱も窯業遺跡であることから、三彩は製作見本の様として官衙から渡ったと判断した。 堀・溝は15～16世紀の所産とみられ、15世紀後葉移封してきた藤岡氏、その後は佐野氏家臣の大貫氏の居城である黒持藤岡城跡の西端と推定した。

栃木県埋蔵文化財調査報告第 393 集

ホクチヤ遺跡

—快速で安全な進づくり事業費（補助）一般県道
佐野環状線高神工区に伴う発掘調査—

発 行 栃木県教育委員会

宇都宮市塙田 1-1-20

TEL 028 (623) 3425

公益財団法人とちぎ未来づくり財団

宇都宮市本町 1-8

TEL 028 (643) 1011

令和元年 6月 28 日発行

編 集 公益財団法人とちぎ未来づくり財団

埋蔵文化財センター

下野市篠 474 番地

TEL 0285 (44) 8441

印 刷 下野印刷株式会社
